

### 第Ⅲ部 分析編

#### 第5章 性別から見た不登校状況

##### 1 小学校の時の学校生活（問3）

小学校時における「授業」（問3a）と「先生との関係」（問3c）の評価（楽しさ）に男女差はない。しかし、「友達との関係」（問3b）における「楽しさ」には男女差が見られる。

■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

	授業(a)、友達との関係(b)、先生との関係(c)における楽しさ（問3）				合計
	1. よくあてはまる	2. 少しあてはまる	3. あまりあてはまらない	4. まったくあてはまらない	
男子	340人	210人	75人	37人	662人
	<b>51.4%</b>	31.7%	11.3%	5.6%	42.2%
	6.1	-1.3	-4.1	-3.4	
女子	326人	315人	172人	94人	907人
	35.9%	34.7%	19.0%	<b>10.4%</b>	57.8%
	-6.1	1.3	4.1	3.4	
合計	666人	525人	247人	131人	1569人

「友達との関係が楽しかったか」という設問に対して「1. よくあてはまる」という回答の比率は男子(51.4%) > 女子(35.9%)、「3. あまりあてはまらない」という回答の比率は男子(11.3%) < 女子(19.0%)、「4. まったくあてはまらない」という回答の比率は男子(5.6%) < 女子(10.4%)で、ここには有意に大きな差が示されている。全般的に人間関係に困難を感じているといえるが、その中でも女子の方が男子に比べて小学校時の人間関係に困難を感じていた傾向が強く見られる。

##### 2 学校を休みはじめたきっかけ（問4-1）

■男女別の各項目の選択率とP値

※設問及び選択肢については、P.9を参照する。

問4	男子	女子	P値
1. 友人	43.4%	60.9%	<b>0.0</b>
2. 先生	25.0%	27.7%	0.26
3. 勉強	31.6%	31.9%	0.92
4. 部活の友人	19.9%	25.7%	<b>0.008</b>
5. きまり	9.6%	10.8%	0.49
6. 順応	15.8%	18.4%	0.19
7. 環境の変化	8.3%	11.0%	0.1
8. 親	11.7%	16.3%	0.01
9. 家族	9.1%	11.0%	0.26

10. 病気	11.8%	16.9%	<u>0.007</u>
11. 生活	35.1%	34.5%	0.85
12. ネット等	18.5%	13.5%	<u>0.009</u>
13. その他	15.6%	16.5%	0.68
14. なし	6.7%	4.9%	0.15

男女ともにその選択率が多い「きっかけ」項目は、「1. 友人」「11. 生活」「3. 勉強」であり、この傾向は男女間で共通している。しかし、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

男子に比べて女子の選択率が有意に高い項目は、「1. 友人」「4. 部活の友人」「10. 病気」「8. 親」であり、特に、「1. 友人」を理由として挙げている回答者は男子 43.4%、女子 60.9%で、その差は非常に大きい。

それに対して、「12. ネット等」は、男女ともに顕著に高い選択率を示す項目ではないが、男子の方が女子に比べて有意な差が現れている。

思春期における女子は、男子に比べて「人間関係」のつまづきをきっかけとして不登校になりやすい傾向がうかがわれる。

(P 値は統計用語であり、ある実験中に群間差が偶然生じる可能性を示す尺度。例えば、P 値が 0.01 (P=0.01) というのは、この結果を偶然生じることが 100 回に 1 回あることを意味する。)

### 3 不登校の継続理由 (問5)

#### ■男女別の各項目の選択率と P 値

※設問及び選択肢については、P. 13 を参照する。

問5	男子	女子	P 値
1. 友人	32.7%	47.2%	<u>0.0</u>
2. 先生	13.6%	18.8%	<u>0.008</u>
3. 非行	9.2%	9.1%	1.0
4. 無気力	46.9%	42.8%	0.12
5. 悪意なし	28.7%	23.6%	0.0025
6. 受動的	12.1%	13.7%	0.39
7. 不安	36.3%	48.9%	<u>0.0</u>
8. 無理解	20.8%	19.4%	0.56
9. 注意不足	6.3%	6.9%	0.70
10. 生活	34.0%	34.6%	0.87
11. 勉強	26.0%	28.9%	0.22
12. 支援不足	5.6%	4.1%	0.2
13. 助言	7.5%	9.2%	0.26
14. その他	12.4%	15.7%	0.07
15. 不明	4.1%	2.3%	0.06

男子において選択率が高いのは、「4. 無気力」(46.9%)「7. 不安」(36.3%)、「10. 生活」(34.0%)、「1. いやがらせやいじめをする生徒の存在や、友人との人間関係のため」(32.7%)で

ある。

女子の場合は「7. 不安」(48.9%)「1. 友人」(47.2%)「4. 無気力」(42.8%)「10. 生活」(34.6%)となっている。

順番は異なっているが、選択率が高い4項目は男女で共通している。この点からすれば、不登校の継続理由は、大枠では似通っている。

その一方で、男女間での違いもある。男女の間でその選択率に特に大きな差が見られる項目は、「1. 友人」(男子 32.7%<女子 47.2%)、「7. 不安」(男子 36.3%<女子 48.9%)、「5. 悪意なし」(男子 28.7%>女子 23.6%)などで差が生じている。

女子の方が、「友人関係」に問題があって不登校を継続する傾向が強いが、同時に、「学校へ行かなくてはいけない」という思いも強いことがうかがわれる。それに対して、男子の場合は、女子に比べて、学校へ行かないことをあまり悪く思わない傾向にあると考えられる。

マルチプルアンサーへの選択項目数における男女差について、例えば、問4-1の「きっかけ」での女子の項目選択数の平均は3.0、男子の平均は2.6、統計的には95%の有意水準で女子の方が男子よりも選択数が多い。同様に、(問5)の「継続理由」でマルチプルアンサーにおいても、男子の選択数の平均3.0に対して女子の平均は3.3となっており、女子の方が多い。

#### 4 中学校3年生時の施設の利用状況・相談した人(問6)

##### ■男女別の各項目の選択率とP値

※設問及び選択肢については、P.16を参照する。

問6	男子	女子	P値
1. 適指	18.3%	21.5%	0.13
2. 相談	4.8%	6.7%	0.15
3. 見相	5.0%	5.6%	0.68
4. 保健	0.8%	1.6%	0.25
5. 病院	21.6%	26.7%	0.02
6. FS	7.8%	9.7%	0.22
7. 民間	7.4%	8.5%	0.52
8. 養教	16.9%	29.6%	<u>0.0</u>
9. 教師	31.6%	29.4%	0.38
10. SC	28.7%	39.6%	<u>0.0</u>
11. その他	5.3%	8.5%	0.02
12. なし	29.5%	18.7%	<u>0.0</u>

男子において選択率が高い項目は順に、「9. 教師」(31.6%)、「12. なし」(29.5%)、「10. SC」(28.7%)、女子の場合は「10. SC」(39.6%)、「8. 養教」(29.6%)、「9. 教師」(29.4%)である。

男女の間で有意差があるもののうち、男子に比べて女子の方が高かったのは、「10. SC」(男子 28.7%<女子 39.6%)、「8. 養教」(男子 16.9%<女子 29.6%)、であり、女子に比べて男子の方が高かったのは「12. なし」(男子 29.5%>女子 18.7%)となっている。

## 5 中学校3年生時の支援のニーズ（問7）

### ■男女別の各項目の選択率とP値

※設問及び選択肢については、P. 18 を参照する。

問7	男子	女子	P値
1. 進学	22.9%	23.0%	1.0
2. 仕事	11.6%	11.8%	0.97
3. 勉強	22.1%	27.5%	0.02
4. 技能	22.7%	21.1%	0.49
5. 表現	29.7%	33.3%	0.14
6. 居場所	23.2%	26.4%	0.17
7. 悩み	25.7%	38.2%	<b>0.0</b>
8. 生活	9.3%	9.0%	0.91
9. その他	4.6%	5.7%	0.41
10. なし	37.1%	30.0%	<b>0.04</b>

男子において選択率が高い項目は順に、「10. なし」（37.1%）、「5. 表現」（29.7%）、「7. 心の悩み」（25.7%）、女子では、「7. 悩み」（38.2%）、「5. 表現」（33.3%）、「10. なし」（30.0%）となっている。

男女の間で有意差があるもののうち、男子に比べて女子の方が高かったのは、項目は、「7. 悩み」（男子25.7%＜女子38.2%）、「3. 悩み」（男子22.1%＜女子27.5%）であり、女子に比べて男子の方が高かったのは、「10. なし」（男子37.1%＞女子30.0%）である。

「7. 悩み」や「3. 勉強」は女子の方が強い。「10. なし」の男子の選択率と問6の結果から、男子は、支援の利用状況も、支援のニーズも少ないという傾向がうかがえる。

## 6 中学校3年生時の休んでいたときの気持ち（問8）

### ■「a 特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった」について、男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

	a 特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった			
	1. そう思う	2. 少しそう思う	3. そう思わない	合計
男子	174人	196人	270人	640人
	27.2%	30.6%	42.2%	41.9%
	1.3	2.8	-3.6	
女子	216人	214人	458人	888人
	24.3%	24.1%	51.6%	58.1%
	-1.3	-2.8	3.6	
合計	390人	410人	728人	1528人

質問(a)の「特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった」という質問に対しては男子の27.2%、女子の24.3%が「1. そう思う」と答えている。標準化残差から判断すれば、男女間のこの比率の差は有意ではないが、「2. 少しそう思う」では男子(30.6%)>女子(24.1%)、「3. そう思わない」では男子(42.2%)<女子(51.6%)で、全体的傾向としては明確に、学校に行かないことを「気にしない」度合いは男子の方が強い。いずれにしても、男女問わず不登校経験者の1/4強が学校を休むことへの抵抗感がないということに留意する必要がある。

質問(b)の「自分自身は悪いこととは思わなかったが、他人の見方が気になった」については、「1. そう思う」という選択肢では男子(26.8%)>女子(21.9%)、「2. 少しそう思う」では男子(35.5%)<女子(41.3%)となっており、有意な差が見られる。

■ 「b 自分自身は悪いこととは思わなかったが、他人の見方が気になった」について、男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
(上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差)

	b 自分自身は悪いこととは思わなかったが、他人の見方が気になった			
	1. そう思う	2. 少しそう思う	3. そう思わない	合計
男子	172人	228人	243人	643人
	26.8%	35.5%	37.8%	42.0%
	2.2	-2.3	0.4	
女子	194人	367人	327人	888人
	21.9%	41.3%	36.8%	58.0%
	-2.2	2.3	-0.4	
合計	366人	595人	570人	1531人

質問(c)の「学校へ行きたかったが、行けなかった」については、「1. そう思う」で男子(25.2%)<女子(30.3%)、「3. そう思わない」は男子(42.6%)>女子(38.0%)となっている。

■ 「c 学校へ行きたかったが、行けなかった」について、男女別の各項目の選択数と選択率及びP値(上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差)

	c 学校へ行きたかったが、行けなかった			
	1. そう思う	2. 少しそう思う	3. そう思わない	合計
男子	163人	209人	276人	648人
	25.2%	32.3%	42.6%	41.9%
	-2.2	0.2	1.8	
女子	272人	285人	342人	899人
	30.3%	31.7%	38.0%	58.1%
	2.2	-0.2	-1.8	
合計	435人	494人	618人	1547人

問8a及び問8cから、女子において、本当は「学校に行きたかった」のに、何らかの「理由」で学校に「行けなかった」、いわば不本意な不登校の傾向が強く見られる。男子においては、学校へ行かないことを余り悪く思わない傾向が強く見られる。

## 7 中学校3年生時の学校以外の方法による学習ニーズ（問9）

■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

問9	1. 思っていた	2. 思っていなかった	合計
男子	240人	404人	644人
	37.3%	62.7%	41.8%
	-3.7	<u>3.7</u>	
女子	418人	479人	897人
	46.6%	53.4%	58.2%
	<u>3.7</u>	-3.7	
合計	658人	883人	1541人

勉強を続けたいと「1. 思っていた」者の比率は、男子（37.3%）＜女子（46.6%）で、有意に女子の比率が高くなっている。問7の「勉強」への支援に対する女子のニーズの高さとも併せ見ると、「勉強」へのニーズは男子よりも女子の方が高い傾向が見られる。

## 8 中学3年生時の将来の夢・希望（問10）

■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

問10	1. あった	2. ぼんやりとあった	3. なかった	合計
男子	121人	223人	310人	654人
	18.5%	34.1%	47.4%	42.0%
	-3.6	-0.7	<u>3.7</u>	
女子	236人	324人	342人	902人
	26.2%	35.9%	37.9%	58.0%
	<u>3.6</u>	0.7	-3.7	
合計	357人	547人	652人	1556人

「1. あった」という回答の比率は 男子（18.5%）＜女子（26.2%）となっており、有意に女子の比率が高くなっている。それに対して「3. なかった」という回答では、男子（47.4%）＞女子（37.9%）と男子の比率が高い。男子に比べて、女子の方が将来への夢や希望を持っていたことがうかがわれる。

## 9 不登校に対する後悔の有無（問 13）

■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

問 13	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	合計
男子	283 人	173 人	76 人	116 人	648 人
	43.7%	26.7%	11.7%	17.9%	42.2%
	<u>3.2</u>	-3.4	-0.1	0.2	
女子	316 人	310 人	105 人	156 人	887 人
	35.6%	35.0%	11.8%	17.6%	57.8%
	-3.2	<u>3.4</u>	0.1	-0.2	
合計	599 人	483 人	181 人	272 人	1535 人

「1. 行けばよかった」という回答の比率は、男子（43.7%）>女子（35.6%）と、有意に男子の回答率が高い。それに対して、「2. しかたがなかった」という回答では、男子（26.7%）<女子（35.0%）と、女子の比率が高くなっている。不登校について、男子においては後悔する傾向が、女子においては「しかたがなかった」こととして考える傾向が強く見られる。

## 10 中学校卒業後の実際の進路と希望した進路の相違（問 14）

■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

問 14	1. 希望どおりだった	2. 希望とは少しちがっていた	3. 希望とはかなりちがっていた	4. 希望とはまったくちがっていた	合計
男子	283 人	206 人	72 人	96 人	657 人
	43.1%	31.4%	11.0%	14.6%	42.3%
	-1.1	0.2	0.7	0.6	
女子	410 人	277 人	88 人	121 人	896 人
	45.8%	30.9%	9.8%	13.5%	57.7%
	1.1	-0.2	-0.7	-0.6	
合計	693 人	483 人	160 人	217 人	1553 人

中学3年生時の自分の将来についての夢や希望の有無（問 10）については、「将来についての夢や希望」に関しては、女子は男子に比べて「1. あった」と回答した者の比率が有意に高かった。しかし、「実際の進路」と「希望の進路」との相違の評価に関して、男女間に有意な差は見られない。

## 11 中学校卒業後の施設の利用状況・相談した人（問 16）

### ■男女別の各項目の選択率と P 値

※設問及び選択肢については、P. 30 を参照する。

問 16	男子	女子	P 値
1. 教育支援センター（適応指導教室）	5.1%	4.5%	0.66
2. 教育相談所	1.9%	1.9%	1.0
3. 児童相談所、福祉事務所	2.8%	2.0%	0.42
4. 職業安定所（ハローワーク）	16.1%	16.9%	0.72
5. 保健所・保健センター	1.2%	2.2%	0.2
6. 病院・診療所	<b>24.3%</b>	<b>32.6%</b>	<b>0.0</b>
7. 民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）	4.2%	4.0%	0.99
8. 4. 以外の職業相談・支援などをする民間の機関（「サポートステーション」と呼ばれる場所など）	2.2%	1.7%	0.62
9. 7. 以外の心理相談・カウンセリングなどをする民間の機関	5.7%	6.8%	0.44
10. 学校の養護教諭（保健室の先生）	<b>5.1%</b>	<b>11.1%</b>	<b>0.0</b>
11. 学校の先生（担任の先生など）	<b>19.0%</b>	<b>25.0%</b>	<b>0.07</b>
12. 学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）	<b>7.1%</b>	<b>10.9%</b>	<b>0.02</b>
13. その他	6.7%	7.6%	0.53
14. 何も利用しなかった	<b>43.2%</b>	<b>36.5%</b>	<b>0.01</b>

選択項目の「14. 何も利用しなかった」「6. 病院・診療所」「11. 学校の先生」がこの順番で選択率が高いという点では男女で共通している。

男女の間で有意差があるもののうち、男子に比べて女子の方が高かったのは、「10. 学校の養護教諭」（男子 5.1% < 女子 11.1%）、「6. 病院・診療所」（男子 24.3% < 女子 32.6%）、「11. 学校の先生」（男子 19.0% < 女子 25.0%）、「12. 学校にいる相談員」（男子 7.1% < 女子 10.9%）、「女子に比べて男子の方が高かったのは、「14. 何も利用しなかった」（男子 43.2% > 女子 36.5%）である。

女子は卒業後も「学校での支援」を求める傾向が強いが、男子においては、「何も利用しなかった」と回答する傾向が顕著である。

## 12 中学校卒業後の支援に対するニーズ（問 17）

### ■男女別の各項目の選択率

※設問及び選択肢については、P. 33 を参照する。

問 17	男子	女子	P 値
1. 進学するための相談や手助け	21.3%	19.4%	0.39
2. 仕事につくための相談や手助け	25.8%	29.6%	0.11
3. 学校の勉強についての相談や手助け	18.6%	18.3%	0.9
4. 将来生きていくためや仕事に役立つ技術や技能の習得についての相談や手助け	33.1%	33.5%	0.91
5. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりする方法についての指導	25.6%	29.5%	0.11

6. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所	23.8%	26.1%	0.32
7. 心の悩みについての相談	<u>21.6%</u>	<u>33.3%</u>	<u>0.0</u>
8. 規則正しい生活習慣についての指導	9.0%	9.4%	0.85
9. その他	2.8%	2.6%	0.91
10. とくにない	38.0%	33.7%	0.08

男子で選択率が高いのは順番に「10. とくにない」(38.0%)、「4. 将来生きていくためや仕事に役立つ技術や技能の習得についての相談や手助け」(33.1%)、「2. 仕事につくための相談や手助け」(25.8%)、女子では「10. とくにない」(33.7%)、「4. 将来生きていくためや仕事に役立つ技術や技能の習得についての相談や手助け」(33.5%)、「7. 心の悩みについての相談」(33.3%)となっている。男女間で有意な差があるのは「7. 心の悩みについての相談」(男子 21.6% < 女子 33.3%)となっている。

全体的な傾向としては、「経済的自立」が可能になるような支援を求める傾向がうかがえる。そして、女子については「心の悩みについての相談」を求める傾向が顕著である。

### 13 現在の就業状況 (問 24)

分析に当たっては、問 24 の選択肢「2. 家業を手伝っている」と「4. 自分で会社などを経営している」を統合して、「2. 家業手伝い、会社経営」とリコードしている。

※以下のとおり略語を用いる。

「1. 正社員として会社などに勤めている」 = 「1. 正社員」

「2. 家業を手伝ったり、自分で会社などを経営している」 = 「2. 家業手伝い・会社経営」

「3. パート、アルバイトとして会社などに勤めている」 = 「3. パート、アルバイト」

「4. その他」 = 「4. その他」 「5. とくに仕事にはついていない」 = 「5. 未就業」

#### ■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差 (上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差)

問 24	1. 正社員	2. 家業手伝い ・会社経営	3. パート、 アルバイト	4. その他	5. 未就業	合計
男子	91 人	16 人	175 人	42 人	321 人	645 人
	14.1%	2.48	27.1%	6.5%	49.8%	41.9%
	<u>5.2</u>	-1.8	-4.1	-2.6	<u>2.9</u>	
女子	56 人	37 人	332 人	92 人	378 人	895 人
	6.3%	4.1%	37.1%	10.3%	42.2%	58.1%
	-5.2	1.8	<u>4.1</u>	<u>2.6</u>	-2.9	
合計	147 人	53 人	507 人	134 人	699 人	1540 人

男女の間で有意差があるもののうち、男子に比べて女子の方が高かったのは、「3. パート、アルバイト」(男子 27.1% < 女子 37.1%)、「4. その他」(男子 6.5% < 女子 10.3%)であり、女子に比べて男子の方が高かったのは、「1. 正社員」(男子 14.1% > 女子 6.3%)、「5. 未就業」(男子 49.8% > 女子 42.2%)である。

全体的にみれば、男女ともに、「5. 未就業」という回答の比率が高い。

#### 14 中学校卒業時と比べて現在の自分が成長したところ（問 27）

##### ■男女別の各項目の選択率と P 値

問 27	男子	女子	P 値
1. 身のまわりのことが自分でできること	45.4%	46.6%	0.677
2. 身体が健康になったこと	27.1%	24.7%	0.32
3. 生活のリズムがつかれること	40.7%	36.9%	0.137
4. 自分で働いて収入を得ようとする	45.1%	49.0%	0.138
5. 人とうまくつきあえること	46.9%	45.4%	0.582
6. 人の痛みが分かるようになったり、人に対して優しくなったこと	45.8%	50.9%	0.055
7. 自分に自信が持てること	34.5%	33.7%	0.773
8. 家族との関係が改善されたこと	<u>22.1%</u>	<u>27.5%</u>	<u>0.018</u>
9. 将来の希望が持てること	32.2%	32.5%	0.968
10. かつしたり、いらいらしなくなったこと	<u>22.5%</u>	<u>16.0%</u>	<u>0.001</u>
11. いつまでもくよくよ悩まなくなったこと	25.0%	28.1%	0.178
12. 自分の気持ちをはっきり表現できること	28.9%	33.0%	0.094
13. 孤独に耐えられること	26.8%	24.4%	0.311
14. 学力が身に付いていること	30.0%	25.9%	0.089
15. その他	5.1%	7.6%	0.065
16. 成長したとは思えない	8.3%	6.3%	0.15

男子で選択率が高い項目は順番に「5. 人とうまくつきあえること」（46.9%）、「6. 人の痛みが分かるようになったり、人に対して優しくなったこと」（45.8%）、「1. 身のまわりのことが自分でできること」（45.4%）、女子の場合は、「6. 人の痛みが分かるようになったり、人に優しくなったこと」（50.9%）、「4. 自分で働いて収入を得ようとする」（49.0%）、「1. 身のまわりのことが自分でできること」（46.6%）となっている。

男女の間で有意差があるもののうち、男子に比べて女子の方が高いのは、「8. 家族との関係が改善されたこと」（男子 22.1% < 女子 27.5%）であり、女子に比べて男子の方が高いのは、「10. かつしたり、いらいらしなくなったこと」（男子 22.5% > 女子 16.0%）である。

#### 15 支えとなるアドバイスをしてくれた人（問 28）

##### ■男女別の各項目の選択率と P 値

問 28	男子	女子	P 値
1. 母親	<u>52.1%</u>	<u>60.1%</u>	<u>0.003</u>
2. 父親	<u>32.2%</u>	<u>25.9%</u>	<u>0.01</u>
3. きょうだい	20.2%	24.9%	0.04
4. 祖父母	13.8%	11.6%	0.24
5. 先輩・友人	<u>39.8%</u>	<u>47.2%</u>	<u>0.006</u>
6. 仕事の上司・同僚	11.8%	12.9%	0.58

7. 妻・夫	<u>0.8%</u>	<u>3.5%</u>	<u>0.002</u>
8. 子ども	0.5%	2.0%	0.02
9. その他	<u>20.1%</u>	<u>24.7%</u>	0.04
10. 特にな	<u>24.5%</u>	<u>15.8%</u>	<u>0.0</u>

男女ともに、「1. 母親」「5. 先輩・友人」「2. 父親」など身近な人間関係にある者の励ましやアドバイスが支えになったと回答している。

男女の間で有意差があるもののうち、男子に対して女子の方が高いのは、「1. 母親」（男子 52.1% < 女子 60.1%）、「5. 先輩・友人」（男子 39.8% < 女子 47.2%）、「7. 妻・夫」（男子 0.8% < 女子 3.5%）、であり、女子に対して男子の方が高いのは、「10. 特にな」（男子 24.5% > 女子 15.8%）、「2. 父親」（男子 32.2% > 女子 25.9%）である。

なお、選択率は低いものの、女子は、男子に比べ、「7. 妻・夫」による励ましやアドバイスが支えになったと回答する者が多いのは、新しい家族の形成によって人間関係が多様化したことによるものと考えられる。それに対して、一般的に、調査時点では、まだ新しい家族を形成している者が少ないと考えられる男子では、新たな支えや励ましを受けることが少なく、それまでの人間関係の中で支援を受けている様子がうかがえる。

## 16 不登校による苦労や不安（問 30）

■ 「a. 受験や仕事などで苦労した」について、男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

	a. 受験や仕事などで苦労した			
	1. おおいにあった	2. 少しはあった	3. まったくなかった	合計
男子	154 人	191 人	290 人	635 人
	24.3%	30.1%	45.7%	41.7%
	<u>2.45</u>	-0.53	-1.52	
女子	169 人	278 人	440 人	887 人
	19.1%	31.3%	49.6%	58.3%
	-2.45	0.53	1.52	
合計	323 人	469 人	730 人	1522 人

「a. 受験や仕事などで苦労した」については、「1. おおいにあった」という回答が、男子（24.3%）、女子（19.1%）であり、男子の比率は女子に比べて高い。

■「d. 他人との関わりに不安を感じるがあった」について、男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

	d 他人との関わりに不安を感じるがあった			
	1. おおいにあった	2. 少しはあった	3. まったくなかった	合計
男子	242 人	220 人	182 人	644 人
	37.6%	34.2%	28.3%	41.7%
	-4.01	1.72	<u>2.8</u>	
女子	430 人	270 人	199 人	899 人
	47.8%	30.0%	22.1%	58.3%
	<u>4.0</u>	-1.72	-2.75	
合計	672 人	490 人	381 人	1543 人

「d. 他人との関わりに不安を感じるがあった」については、男女間でかなり大きな差がある。「1. おおいにあった」という回答の比率は、女子（47.8%）>男子（37.6%）、「3. まったくなかった」という回答の比率は、男性（28.3%）>女子（22.1%）という比率を上回っている。

問 30a 及び問 30d から、男子は受験や仕事といった進路に関する問題に苦勞を感じており、それに対して女子は他人との関わりという人間関係の問題に不安を抱えてきたことがうかがえる。既に、問 3、問 4 や問 5 において、学校生活における女子の人間関係へのこだわりが見られたのだが、中学卒業後においても、女子にとって人間関係の比重は男子よりも大きいようである。

なお、「b. 体力が低下したり不足したりして苦勞した」と「c. 生活リズムが乱れ苦勞した」に関しては男女の間に有意な差は見られない。

## 17 不登校によるマイナスの影響（問 31）

■男女別の各項目の選択数と選択率及び標準化残差  
（上段…選択数、中段…選択率、下段…標準化残差）

問 31	1. 感じている	2. 感じていない	3. どちらともいえない	合計
男子	185 人	269 人	200 人	654 人
	28.3%	41.1%	30.6%	42.1%
	<u>3.4</u>	-0.06	-2.97	
女子	188 人	372 人	341 人	901 人
	20.9%	41.3%	37.9%	57.9%
	-3.38	0.06	<u>3.0</u>	
合計	373 人	641 人	541 人	1555 人

「かつて不登校であったことがマイナスに影響していると感じているか」という質問に対して、「1. 感じている」という回答者の比率は、男子（28.3%）>女子（20.9%）、「3. どちらともいえない」という回答の比率は男子（30.6%）<女子（37.9%）である。「2. 感じていない」という回答の比率に男女差は見られない。不登校経験によるマイナスの影響は男子によってより強く認識されているということがうかがわれる。

## 18 今後の支援に対するニーズ（問 34）

### ■男女別の各項目の選択率と P 値

※設問及び選択肢については、P. 48 を参照する。

問 34	男子	女子	P 値
1. 進学	13.6%	11.7%	0.29
2. 仕事	39.7%	42.1%	0.38
3. 勉強	13.9%	12.0%	0.30
4. 技能	41.7%	44.0%	0.41
5. 表現	25.8%	27.6%	0.47
6. 居場所	26.4%	26.8%	0.91
7. 悩み	<u>23.8%</u>	<u>33.1%</u>	<u>0.0</u>
8. 生活	10.5%	9.4%	0.54
9. その他	2.8%	3.1%	0.8
10. なし	34.2%	29.9%	0.08

全体としては男女間で大きな違いは認められず、男女ともに、経済的・社会的自立へのニーズが高い。

男女の間で有意差があるもののうち、男子に比べて女子の方が高かったのは、「7. 悩み」（男子 23.8% < 女子 33.1%）となっており、それ以外の項目については、ほとんど男女の間に有意な差は見られない。問 17 の結果と同様に、女子については心の悩みについての相談を求める傾向がうかがわれる。

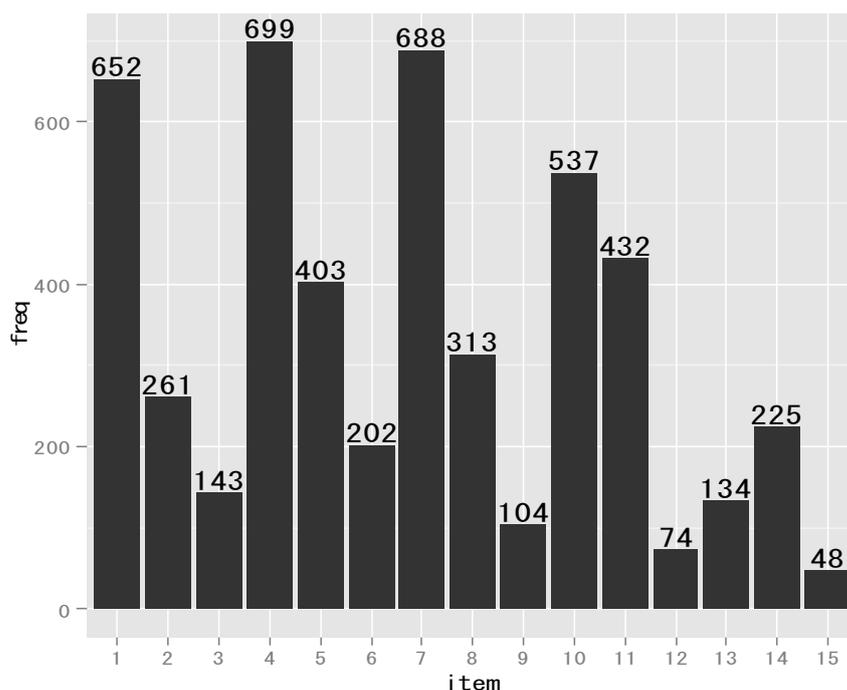
## 第6章 不登校の継続理由・不登校の態様

### 1 単純集計結果

問5は15個の選択肢からなる多肢選択形式の質問であり、選択者数の多い順に並べ替えると、以下のような結果になる。

※設問及び選択肢についてはP.13を参照する。

問5	総回答数	有効回答数	NA	回答数	比率1	比率2
4. 無気力	1604	1576	28	699	43.6%	44.4%
7. 不安	1604	1576	28	688	42.9%	43.7%
1. 友人	1604	1576	28	652	40.6%	41.4%
10 生活リズム	1604	1576	28	537	33.5%	34.1%
11. 勉強	1604	1576	28	432	26.9%	27.4%
5. 悪意なし	1604	1576	28	403	25.1%	25.6%
8. 無理解	1604	1576	28	313	19.5%	19.9%
2. 先生	1604	1576	28	261	16.3%	16.6%
14. その他	1604	1576	28	225	14.0%	14.3%
6. 受動的	1604	1576	28	202	12.6%	12.8%
3. 非行	1604	1576	28	143	8.9%	9.1%
13. 助言	1604	1576	28	134	8.4%	8.5%
9. 注意不足	1604	1576	28	104	6.5%	6.6%
12. 支援不足	1604	1576	28	74	4.6%	4.7%
15. 不明	1604	1576	28	48	3.0%	3.0%



## 2 不登校の「きっかけ」（問4）と「継続理由」（問5）との関係

次の表は14個の選択肢からなる「不登校のきっかけ」（問4）と15個の選択肢からなる【（問5）不登校の継続理由】のクロス集計結果を要約したものである。表中の数値は各クロス集計表における同時選択セル（両方の項目を選択した回答者の数）の標準化残差を示したものである。

※設問及び選択肢についてはP.9、13を参照する。

		問5														
		1 友人	2 先生	3 非行	4 無 気力	5 悪 意 無 し	6 受 動 的	7 不 安	8 無 理 解	9 注 意 不 足	10 生 活	11 勉 強	12 支 援 不 足	13 助 言	14 そ の 他	15 不 明
問 4	1. 友人	<u>24.5</u>	4.2	-3.4	NA	NA	NA	5.3	NA	NA	-3.1	3.2	NA	4.2	NA	-4.8
	2. 先生	NA	<u>21.4</u>	NA	NA	3.5	NA	NA	5.2	NA	NA	NA	3.6	NA	NA	NA
	3. 勉強	NA	3.1	NA	<u>7.7</u>	5.3	5.5	NA	5.6	NA	4.5	<u>21.8</u>	NA	NA	NA	-3.8
	4. 部活の 友人	<u>10.3</u>	3.9	NA	NA	NA	NA	4.8	NA	NA	NA	NA	NA	3.0	NA	NA
	5. きまり	-3.4	6.5	<u>9.0</u>	NA	<u>8.3</u>	NA	-3.0	<u>8.2</u>	NA	NA	2.8	NA	NA	NA	NA
	6. 順応	2.8	NA	NA	NA	NA	NA	4.0	NA	NA	NA	4.4	NA	3.5	NA	NA
	7. 環境の 変化	NA	NA	NA	4.7	NA	NA	NA	NA	NA	2.8	3.3	NA	NA	NA	NA
	8. 親	NA	3.6	5.7	4.5	3.4	4.2	NA	4.5	NA	5.3	4.3	NA	NA	NA	NA
	9. 家族	NA	4.6	3.2	5.5	3.4	NA	NA	4.8	NA	5.2	2.7	NA	NA	NA	NA
	10. 病気	NA	2.8	NA	NA	NA	NA	<u>7.5</u>	-2.8	NA	NA	NA	NA	NA	5.1	NA
	11. 生活	-3.6	NA	<u>8.4</u>	<u>9.5</u>	<u>7.9</u>	5.4	NA	<u>7.5</u>	NA	<u>25.3</u>	5.0	NA	NA	NA	-2.9
	12. ネット等	NA	NA	NA	<u>9.4</u>	6.2	4.1	NA	<u>7.0</u>	NA	<u>10.2</u>	6.0	NA	NA	NA	NA
	13. その他	-6.2	NA	5.0	NA	3.0	NA	NA	3.4	NA	3.1	NA	NA	NA	<u>12.4</u>	-3.1
	14. なし	<u>-7.7</u>	-4.0	NA	NA	NA	NA	-3.9	NA	NA	-4.6	-4.7	NA	NA	NA	<u>11.8</u>

上の表から、不登校のきっかけと継続理由においては、明確な関連がうかがえる。とりわけ、強調（斜体下線）部分の数値は両者に強い関連がある。例えば、問5において継続理由の「1. いやがらせやいじめをする生徒の存在や、友人との人間関係のため」を選択した回答者においては、問4のきっかけとして「1. 友人との関係」「4. クラブや部活動の友人・先輩との関係」を選択している回答者の割合が有意に高くなっている。すなわち学校での友人関係やクラブでの友人や先輩との人間関係のつまずきがきっかけで不登校状態に陥り、この人間関係が不登校の継続理由となっていると考えられる。同様の関連が、その他のきっかけと継続理由との間にもうかがえる。次の表はこのような顕著な関連項目を対照表としてまとめたものである。

「不登校のきっかけ」 (問4)		「不登校の継続理由」 (問5)
1. 友人との関係 (いやがらせやいじめ、けんかなど) 4. クラブや部活動の友人・先輩との関係 (先輩からのいじめ、他の部員とうまくいかなかったなど)	→	1. いやがらせやいじめをする生徒の存在や、友人との人間関係のため
2. 先生との関係 (先生がおこる、注意がうるさい、体罰など)	→	2. 先生との関係 (先生がおこる、注意がうるさい、体罰など)のため
3. 勉強が分からない (授業がおもしろくない、成績がよくない、テストがきらいなど)	→	4. 無気力でなんとなく学校へ行かなかったため 11. 勉強についていけなかったため
5. 学校のきまりなどの問題 (学校の校則がきびしいなど)	→	3. 遊ぶためや非行グループにはいていたため 5. 学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため 8. なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できず、自分の好きな方向を選んだため
10. 病気	→	7. 学校へ行こうという気持ちはあるが、身体の調子が悪いと感じたり、ぼんやりとした不安があったりしたため
11. 生活リズムの乱れ (朝起きられないなど)	→	3. 遊ぶためや非行グループにはいていたため 4. 無気力でなんとなく学校へ行かなかったため 5. 学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため 8. なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できず、自分の好きな方向を選んだため 10. 朝起きられないなど生活リズムが乱れていたため
12. インターネットやメール、ゲームなどの影響 (一度始めると止められない、学校より楽しいなど)	→	4. 無気力でなんとなく学校へ行かなかったため 8. なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できず、自分の好きな方向を選んだため 10. 朝起きられないなど生活リズムが乱れていたため
13. その他	→	14. その他
14. とくに思いあたることはない	→	15. わからない

以上から、学校における人間関係でのつまずき、勉強でのつまずき、学校のきまりへの反発等、病気、生活リズムの乱れ等のきっかけが、その後も不登校を継続させる理由となっているということが分かる。

### 3 不登校の類型化

【（問 5）不登校の継続理由】への回答から「不登校の類型化」を行った。データ処理の詳細については「6クラスを示す変数と問 5 とのクロス集計結果の標準化残差」を作成し、以降の分析では5類型とする。

■6クラスを示す変数と問 5 とのクロス集計結果の標準化残差

問 5	クラス 1	クラス 2	クラス 3	クラス 4	クラス 5	クラス 6
1. 友人	<u>3.9</u>	-8.3	-2.8	-12.0	<u>19.9</u>	-5.9
2. 先生	<u>3.2</u>	-1.8	-5.1	1.0	<u>5.3</u>	-3.1
3. 非行	<u>2.2</u>	-3.1	-9.0	<u>17.0</u>	-4.7	-2.2
4. 無気力	<u>11.8</u>	-7.3	<u>7.3</u>	<u>3.7</u>	-16.2	-6.3
5. 悪意なし	<u>17.7</u>	-4.8	-18.4	<u>20.9</u>	-8.2	-4.1
6. 受動的	<u>8.9</u>	-3.8	<u>3.9</u>	-3.4	-5.8	-2.7
7. 不安	<u>5.4</u>	-5.2	<u>14.7</u>	-16.1	-1.3	-6.2
8. 無理解	<u>14.1</u>	-4.9	-13.7	<u>17.2</u>	-7.6	-3.5
9. 注意不足	<u>17.0</u>	-0.9	-8.9	1.5	-3.6	-1.9
10. 生活	<u>9.7</u>	-6.0	<u>5.5</u>	<u>3.2</u>	-13.0	-5.1
11. 勉強	<u>11.0</u>	-6.1	<u>4.3</u>	-2.5	-7.0	-4.3
12. 支援不足	<u>8.6</u>	0.9	-7.2	<u>2.2</u>	-0.4	-1.6
13. 助言	<u>10.8</u>	-0.3	-4.1	-5.1	<u>2.1</u>	-2.1
14. その他	-4.1	<u>24.2</u>	-6.5	-1.1	-0.5	-2.9
15. 不明	-2.7	-1.8	-5.9	-3.4	-3.3	<u>39.7</u>

この集計表から、以下のことが分かる。

- (1) 「クラス 3」に所属すると判断された回答者（654 人）においては、「4. 無気力（7.3）」、「6. 受動的」（3.9）、「7. 不安」（14.7）、「10. 生活」（5.5）、「11. 勉強」（4.3）という継続理由の選択率が有意に高くなっている。
- (2) 「クラス 4」に所属すると判断された回答者（292 人）においては、「3. 非行」（17.0）、「4. 無気力」（3.7）、「5. 悪意なし」（20.9）、「8. 無理解」（17.2）、「10. 生活」（3.2）、「12. 支援不足」（2.2）という継続理由の選択率が有意に高くなっている。
- (3) 「クラス 5」に所属すると判断された回答者（284 人）においては、「1. 友人」の選択率が極めて大きく（標準化残差は 19.9）、「2. 先生」（5.3）、「13. 助言」（2.1）という継続理由の選択率も有意に高くなっている。
- (4) 「クラス 1」に所属すると判断された回答者（206 人）においては、「14. その他」と「15. 不明」の二つの選択肢を除いた、残り 13 項目全てにおいて、その選択率が有意に高くなっている。
- (5) 「クラス 2」に所属すると判断された回答者（92 人）においては、選択肢「14. その他」の選択率が極めて高くなっており、それ以外の選択肢は有意差が見られない。
- (6) 「クラス 6」は、選択肢「15. 不明」の選択率が極めて高くなっており、それ以外の選択肢は有意差が見られない。

以上の各クラスの特徴から、クラス3を「無気力」型、クラス4を「遊び・非行」型、クラス5を「人間関係」型、と名付ける。この3クラスで有効回答者（1576人）の78%がカバーされる（全回答者1604人の76.7%）。

全ての選択肢において選択率が有意に高くなっている「クラス1」の回答者は、その明確な特徴を抽出することが難しいグループである。次の表は、回答者の帰属クラスと（問5）における選択数（何個の「理由」を選択したのか）とのクロス集計表である。

選択数	クラス1	クラス2	クラス3	クラス4	クラス5	クラス6	合計
1	0	51	125	24	78	48	326
2	0	28	161	60	121	0	370
3	1	10	183	73	48	0	315
4	27	2	112	61	29	0	231
5	52	1	58	46	6	0	163
6	57	0	10	19	2	0	88
7	31	0	5	6	0	0	42
8	26	0	0	2	0	0	28
9	10	0	0	1	0	0	11
10	2	0	0	0	0	0	2
合計	206	92	654	292	284	48	1576

以上の表から、クラス1に所属すると判断された回答者の（問5）における「理由」の平均選択数は、6.1と、他の5クラスの回答者と比べるとはるかに多くなっている。（平均選択数は、クラス2が1.6、クラス3が2.8、クラス4が3.5、クラス5が2.2）つまり、クラス1に属すると判断された回答者は、不登校の継続の理由として様々な理由を挙げており、一貫した「理由」を確定できない。したがって、このクラスを「複合」型と名付ける。

さらに、「14. その他」の選択率が有意に高くなっているクラス2と、「15. 不明」の選択率が有意に高くなっているクラス6を合わせて「その他」型と名付ける。

この不登校の6クラスを下のとおり五つにリコードし、以降「不登校の5類型」と呼ぶ。

- クラス番号3 → 類型1：「無気力」型（654人）
- クラス番号4 → 類型2：「遊び・非行」型（292人）
- クラス番号5 → 類型3：「人間関係」型（284人）
- クラス番号1 → 類型4：「複合」型（206人）
- クラス番号2・6 → 類型5：「その他」型（140人）

この各類型に属する回答者の数（単純集計）は次のようになる。

■ 不登校の5類型の単純集計数と率

	類型1 無気力	類型2 遊び・非行	類型3 人間関係	類型4 複合	類型5 その他	NA
回答者数	654	292	284	206	140	28
回答者率	40.8%	18.2%	17.7%	12.8%	8.7%	1.8%

最も人数が多いのは、類型1の「無気力」型 654 人 (40.8%) であり、以下、類型2の「遊び・非行」型 292 人 (18.2%)、類型3の「人間関係」型 284 人 (17.7%)、類型4の「複合」型 206 人 (12.8%)、類型5の「その他」型 140 人 (8.7%) と続く。類型1から類型4の主要4類型で回答者全体 (1604 人) の 89.5% (1436 人) を占めている。

ここで再度、問5の15項目の選択肢と新しい不登校の類型とのクロス集計結果の観測度数テーブルと残差テーブルを示しておく。

■【(問5) 不登校の継続理由】と不登校類型変数とのクロス集計  
(上段…観測度数、下段…標準化残差)

問5	類型1 無気力	類型2 遊び・非行	類型3 人間関係	類型4 複合	類型5 その他
1. 友人	244 -2.8	30 -12.0	267 <u>19.9</u>	111 <u>3.9</u>	0 -10.4
2. 先生	71 -5.1	54 1.0	77 <u>5.3</u>	50 <u>3.2</u>	9 -3.4
3. 非行	9 -9.0	102 <u>17.0</u>	5 -4.7	27 <u>2.2</u>	0 -3.9
4. 無気力	361 <u>7.3</u>	158 <u>3.7</u>	3 -16.2	170 <u>11.8</u>	7 -9.8
5. 悪意なし	10 -18.4	215 <u>20.9</u>	18 -8.2	156 <u>17.7</u>	4 -6.5
6. 受動的	109 3.9	20 -3.4	7 -5.8	66 <u>8.9</u>	0 -4.8
7. 不安	428 <u>14.7</u>	4 -16.1	114 -1.3	126 <u>5.4</u>	16 -8.1
8. 無理解	23 -13.7	164 <u>17.2</u>	10 -7.6	116 <u>14.1</u>	0 -6.2
9. 注意不足	0 -8.9	25 1.5	5 -3.6	70 <u>17.0</u>	4 -1.9
10. 生活	274 <u>5.5</u>	123 <u>3.2</u>	3 -13.0	132 <u>9.7</u>	5 -8.0
11. 勉強	217 <u>4.3</u>	63 -2.5	30 -7.0	122 <u>11.0</u>	0 -7.6
12. 支援不足	1 -7.2	21 <u>2.2</u>	12 -0.4	34 <u>8.6</u>	6 -0.2
13. 助言	33 -4.1	3 -5.1	33 <u>2.1</u>	58 <u>10.8</u>	7 -1.6
14. その他	49 -6.5	36 -1.1	38 -0.5	10 -4.1	92 <u>18.2</u>
15. 不明	0 -5.9	0 -3.4	0 -3.3	0 -2.7	48 <u>22.5</u>

#### 4 不登校の5類型と「性別」（問1）

■不登校の5類型と「性別」の数（上段）と標準化残差（下段）

	類型1 無気力	類型2 遊び・非行	類型3 人間関係	類型4 複合	類型5 その他	合計
男子	259	144	99	85	68	655
	-1.37	<u>2.88</u>	-2.32	-0.14	1.70	
女子	387	146	177	119	71	900
	1.37	-2.88	<u>2.32</u>	0.14	-1.70	
合計	646	290	276	204	139	1555

男子生徒においては類型2の「遊び・非行」型の比率が高く、女子生徒において類型3の「人間関係」型の比率が有意に高くなっている。しかし全体として見れば、「性別」と「不登校の類型」の間にそれほど強い関連は伺えない。

#### 5 不登校の5類型と欠席状況の推移パターン（問2）

不登校の5類型との関連を示したものが、下のクロス集計表である。

統計的には、両変数の間に有意な関連がある。数値的には、推移パターン2222（小学校時から長期欠席状態にあった者）の回答者において、類型4の「複合」型と類型5の「その他」型が有意に高くなっており、両者の間には正の相関があることが示されている。

同様に、推移パターン1112（中学3年時より欠席が長期化した者）の回答者において、類型3の「人間関係」型との間にも正の相関が示されている。

■不登校の5類型の数と「欠席状況の推移パターン」の観測度数（上段）と標準化残差（下段）

	類型1 無気力	類型2 遊び・非行	類型3 人間関係	類型4 複合	類型5 その他	合計
1112 中学3年時より欠席が長期化した者	93	59	62	29	15	258
	-2.0	1.9	<u>2.8</u>	-1.0	-1.8	
1122 中学2年時より欠席が長期化した者	190	95	94	54	39	472
	-0.7	1.0	1.4	-1.3	-0.5	
1222 中学1年時より欠席が長期化した者	172	55	60	59	36	382
	1.5	-2.4	-1.3	1.6	0.5	
2222 小学校時から欠席が長期化した者	94	40	25	40	28	227
	-0.1	-0.4	-2.9	<u>2.2</u>	<u>2.1</u>	
その他	97	39	37	21	18	212
	1.3	-0.1	-0.2	-1.5	-0.2	
合計	646	288	278	203	136	1551

## 6 不登校の5類型と休みはじめたきっかけ（問4）

次の表は、不登校の5類型と【（問4-1）休みはじめたきっかけ】の14項目とのクロス集計表から算出された調整済み標準化残差を配列したものであるが、両者にも強い関連が示されている（斜体下線）。

■不登校の5類型と【（問4-1）休みはじめたきっかけ】の標準化残差

問4	類型1 無気力	類型2 遊び・非行	類型3 人間関係	類型4 複合	類型5 その他
1. 友人	<u>-2.3</u>	-8.2	<u>12.0</u>	<u>4.1</u>	-6.0
2. 先生	<u>-5.6</u>	2.6	1.7	<u>4.0</u>	-0.8
3. 勉強	0.2	1.7	-4.7	<u>8.2</u>	-5.9
4. 部活の友人	0.8	-3.9	<u>4.4</u>	<u>2.1</u>	-4.4
5. きまり	<u>-4.8</u>	<u>7.8</u>	-3.2	<u>3.2</u>	-1.8
6. 順応	1.1	-3.7	0.3	<u>3.7</u>	-1.6
7. 環境の変化	1.1	-0.2	-2.7	<u>3.4</u>	-1.9
8. 親	0.2	0.3	-3.5	<u>5.8</u>	-2.8
9. 家族	-0.7	1.1	-3.3	<u>5.3</u>	-2.0
10. 病気	2.0	-4.3	-0.7	<u>1.7</u>	1.4
11. 生活	1.3	<u>7.0</u>	-11.2	<u>8.1</u>	-6.2
12. ネット等	-1.1	<u>3.4</u>	-5.4	<u>7.2</u>	-3.8
13. その他	-2.8	4.7	-4.3	-0.8	<u>5.1</u>
14. なし	-0.1	0.2	-3.4	-2.4	<u>7.4</u>

類型1の「無気力」型においては、いかなる「きっかけ」項目との正の相関も示されていない。「1. 友人」「2. 先生」「5. きまり」という「きっかけ」との負の相関（その項目の選択率が有意に低い）が強く、関連が低いことを示している。

類型2の「遊び・非行」型では「5. きまり」「11. 生活」「12. ネット等」という「きっかけ」との正の相関（その項目の選択率が有意に高い）が強く、関連が高いことを示している。

類型3の「人間関係」型は「1. 友人」「4. 部活の友人」という「きっかけ」との正の相関（その項目の選択率が有意に高い）が強く関連が高いことを示している。

類型4の「複合」型は「13. その他」「14. なし」以外の「きっかけ」と正の相関を示しており、特定の「きっかけ」との関連は伺えない。

類型5の「その他」型では、「13. その他」「14. なし」の「きっかけ」と正の相関を示しており、それ以外の「きっかけ」との相関は伺えない。

## 第7章 欠席状況の推移パターン

### 1 欠席状況の推移パターン

問2では「(1)小学校」時と「(2)中学校1年生」時、「(3)中学校2年生」時、「(4)中学校3年生」時の4時点での「出席状況」を聞いている。回答選択肢は「1.ほとんど休まなかった」「2.少し休んだ」「3.かなり休んだ」「4.ほとんど休んだ」である。「1.ほとんど休まなかった」「2.少し休んだ」という回答を1、「3.かなり休んだ」「4.ほとんど休んだ」を2とリコードして、その組合せによって欠席状況の推移パターンは以下ようになる。

※千の位が小学校時、百の位が中学校1年生時、十の位が中学2校年生時、一の位が中学校3年生時の状況ということになる。

例) 1112…中学校3年生時から欠席が長期化

1122…中学校2年生時から欠席が長期化

状況	1111	<u>1112</u>	1121	<u>1122</u>	1211	1212	1221	<u>1222</u>
人数	34	<u>261</u>	36	<u>479</u>	12	14	30	<u>387</u>
割合	2.1%	<u>16.3%</u>	2.2%	<u>29.9%</u>	0.7%	0.9%	1.9%	<u>24.1%</u>

2111	2112	2121	2122	2211	2212	2221	<u>2222</u>	<NA>
5	11	3	46	8	3	18	<u>231</u>	26
0.3%	0.7%	0.2%	2.9%	0.5%	0.2%	1.1%	<u>14.4%</u>	1.6%

この集計表から、回答者の欠席状況の推移は、主に次の4パターンであることが分かる。

1112（中学校3年生時から欠席が長期化）：261人（16.3%）

1122（中学校2年生時から欠席が長期化）：479人（29.9%）

1222（中学校1年生時から欠席が長期化）：387人（24.1%）

2222（小学校時から欠席が長期化）：231人（14.4%）

出席と長期欠席が不規則に変動したり、学年とともに出席状況がよくなったりしているなど、その他の欠席状況の推移パターンは、220人（12パターン、全体の13.7%）と比較的少数である。このことは、少なくとも小中学校という義務教育段階では、一度長期欠席状況になると、そこから出席状況に戻ることは難しいことを示している。

これは、長期欠席（不登校）が必ずしもその環境（とりわけ学校生活の環境）要因によるものではなく、欠席が長期化することで、その児童生徒の学習のつまずきや対人関係の変化、生活習慣の乱れなどが起こることにより、一度長期欠席（不登校）になると容易には改善されないことを示している（第6章「2.不登校の『きっかけ』と『継続理由』との関係」参照）。

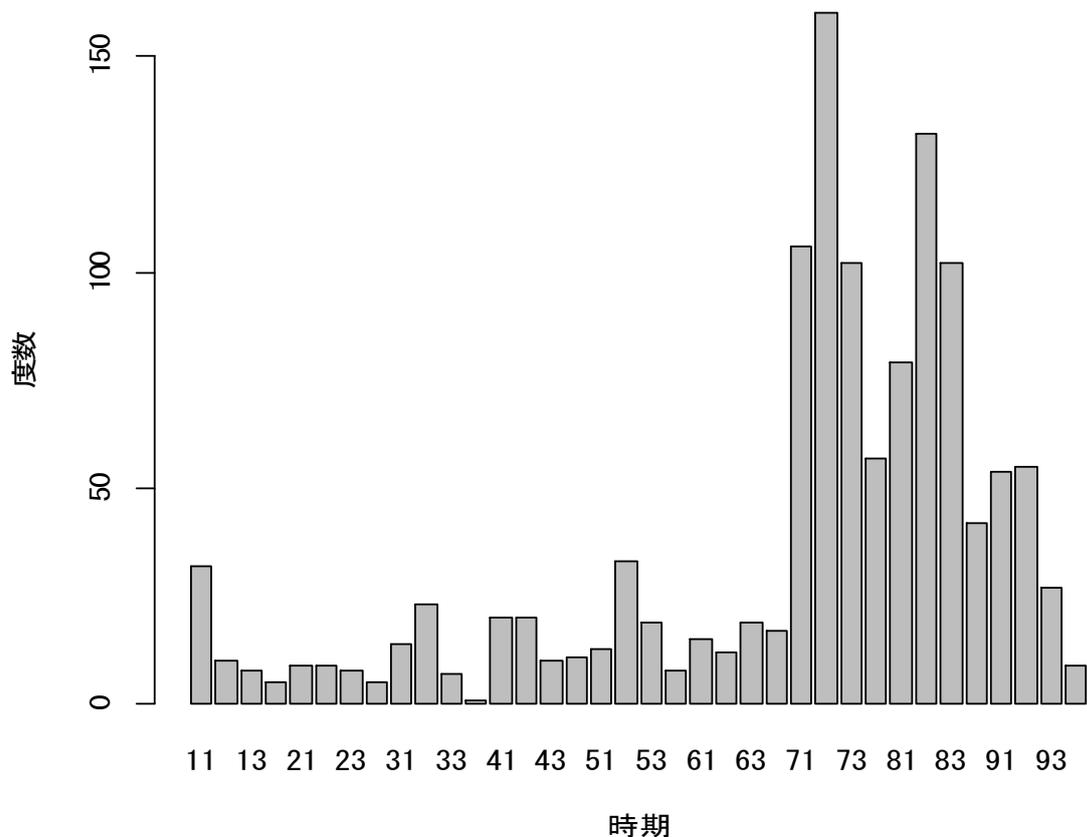
## 2 学校を休みはじめた時期

### (1) 学校を休みはじめた時期 (問 4-2)

【(問 4-2-a, b) 学校を休みはじめた学年と時期】から「学校を休みはじめた時期」を示す新たな変数を作成し、グラフ化したものを下に示す。

	(1) 4～6月	(2) 7～9月	(3) 10月～12月	(4) 1月～3月
(1) 小学校 1 年生	32	10	8	5
(2) 小学校 2 年生	9	9	8	5
(3) 小学校 3 年生	14	23	7	1
(4) 小学校 4 年生	20	20	10	11
(5) 小学校 5 年生	13	33	19	8
(6) 小学校 6 年生	15	12	19	17
(7) 中学校 1 年生	106	160	102	57
(8) 中学校 2 年生	59	132	102	42
(9) 中学校 3 年生	54	55	27	9

学校を休みはじめた時期



このグラフから、中学校 1 年生時 (72) と中学 2 年生時 (82) の 7～9 月に休みはじめた時期が突出していることが分かる。この期間は長期休業中を挟む時期と重なっている。

また、小学校6年生時（1～3月）から中学校1年生時（4～6月）にかけて度数が急激に増えており、これは小学校から中学校への進学など、環境の変化による影響が考えられる。一方で、小学校段階で潜在化していた問題が中学校段階で顕在化していることも考えられ、いわゆる「中一ギャップ」などで片付けることなく、要因分析について慎重に検討する必要がある。

## （2）欠席状況と学校を休みはじめた学年・時期（問2×問4-2-a）

■【（問2）小中学校時の欠席状況】と【（問4-2-a）学校を休みはじめた学年】とのクロス集計

問2	学校を休みはじめた学年（問4-2-a）											合計
	1 小1	2 小2	3 小3	4 小4	5 小5	6 小6	7 中1	8 中2	9 中3	10 わからない	<NA>	
1111	1	0	1	1	1	1	6	3	13	6	1	34
<u>1112</u>	2	2	2	1	4	7	14	83	<u>132</u>	10	4	261
1121	0	1	2	1	1	1	9	18	0	2	1	36
<u>1122</u>	9	3	9	13	13	17	106	<u>280</u>	8	12	9	479
1211	0	0	0	1	0	1	8	0	0	2	0	12
1212	1	0	0	1	2	2	8	0	0	0	0	14
1221	1	0	0	1	5	3	18	1	0	0	1	30
<u>1222</u>	5	6	4	15	28	42	<u>269</u>	7	1	5	5	387
2111	1	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	5
2112	0	2	1	1	3	2	0	0	2	0	0	11
2121	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	3
2122	5	6	2	11	9	3	2	6	0	1	1	46
2211	2	0	1	2	1	0	1	0	0	1	0	8
2212	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3
2221	0	1	4	6	5	1	0	0	0	1	0	18
<u>2222</u>	<u>36</u>	<u>24</u>	<u>47</u>	<u>40</u>	<u>44</u>	<u>12</u>	9	0	0	13	6	231
<NA>	1	0	1	0	3	2	8	7	3	1	0	26
合計	66	47	76	94	119	96	458	406	159	55	28	1604

このクロス集計表から、【（問2）小中学校時の欠席状況】と【（問4-2-a）学校を休みはじめた学年】との間に、相違あるいはタイムラグが生じる回答者がかなりいることが分かる。

例えば、「1112」は、中学校3年生時から「かなり休んだ」「ほとんど休んだ」と答えている回答者(261人)であるが、このうち「最初に学校を休みはじめた」時期が中学3年時と答えた回答者は132人(50.6%)であり、115人(44.1%)は不登校が長期化する以前から休み始めたと同

答している。同様に、「1122」（中学2年時から不登校が長期化した回答者）の場合は479人中の170人（35.5%）が、「1222」（中学1年時から不登校が長期化した回答者）の場合は387人中の100人（25.8%）が、不登校が長期化する以前に学校を休み始めたと回答している。

仮に、「最初に学校を休みはじめた」時期から不登校が長期化するまでの期間を不登校への「潜在期間」とみなすならば、その期間の長短はあれ、不登校生徒のかなりの部分が一定の「潜在期間」を経て不登校状態になったのではないかと推測できる。一度、欠席状態が長期化すれば、そこから回復することはかなり困難であることが欠席パターンによって示されていることから、「最初に学校を休みはじめた」時期と欠席が長期化した時期との間の不登校への「潜在期間」に注目した対応を考えることが必要である。

さらに、「潜在期間」に関連し、年間30日に至らない欠席状態であっても遅刻や早退などが混在している可能性にも注目し、その対応についても考えていくことが必要である。

## 第8章 中学校3年生時の休んでいたときの気持ちと不登校に対する後悔の有無と他項目との関連

### 1 学校回避スコアの作成

「問8」と「問13」を構成している四つの質問に対する回答には、強い相関がうかがえる。次の表は、これら4変数間の関連の強さを示したものである。（表中にはクロス集計表の関連の有無とその強さを示すAICの値が示されており、その値が負であれば当該2変数は関連があること、その値が小さいほど2変数間の関連は強いということを示している。）

	問8a	問8b	問8c	問13
問8a	NA	NA	NA	NA
問8b	-61.087	NA	NA	NA
問8c	-246.079	-14.616	NA	NA
問13	-120.634	-10.916	-178.837	NA

表中のAICの値はすべて負なので、これらの四つの質問への回答には何らかの関連がある。しかし、それらの関連の強さに関しては、かなり大きな違いがあり、Q08bは他の3変数と比べるとその他の変数との関連の度合いはかなり小さいことが分かる。そこで、分析のモデルを単純化するために、以下ではQ08bを除外して分析を進めることとする。

ここでは、問8cを基準にして、問8aと問13をリコードする。（問8a「1と3を入れ替え」問13「1と2を入れ替え」）

学校回避スコア（Disengage. Score）とは、問8a、問8c、問13の相関関係から導き出された合成変数を示し、学校を回避する傾向を示す値である（付録：参考1）。学校回避スコア（Disengage. Score）は、0～7までの変数で表され、数値が大きいほど学校から気持ちが離れていく傾向の不登校を、数値が小さいほど学校へ復帰したい気持ちのある不本意傾向の不登校を示す。

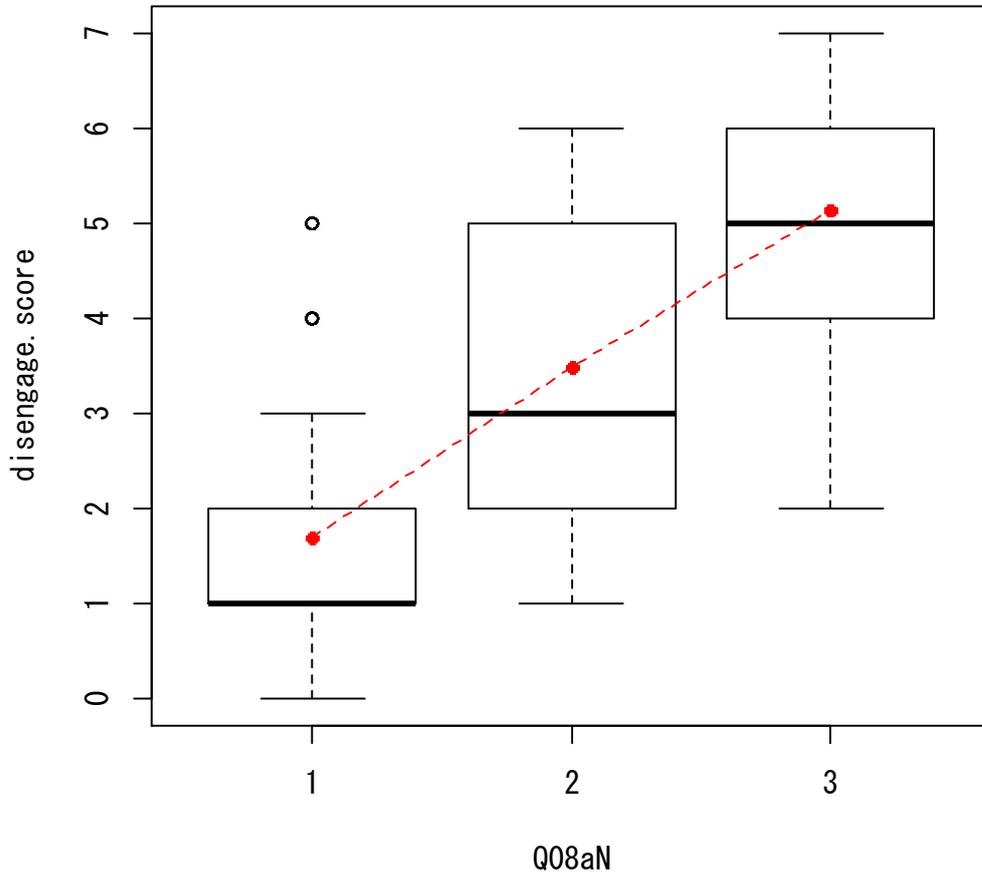
### 2 中学校3年生時に不登校で学校を休んでいた時の気持ちとの関連（問8a）

a. 特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった	回答グループ別のスコア平均値
1. そう思わない	1.69425
2. 少しそう思う	3.48139
3. そう思う	5.14910

Q08aNの回答グループ別のスコア平均値

（回答番号の1と3が元の変数値とは入れ替わっていることに注意）

disengage. score by Q8a



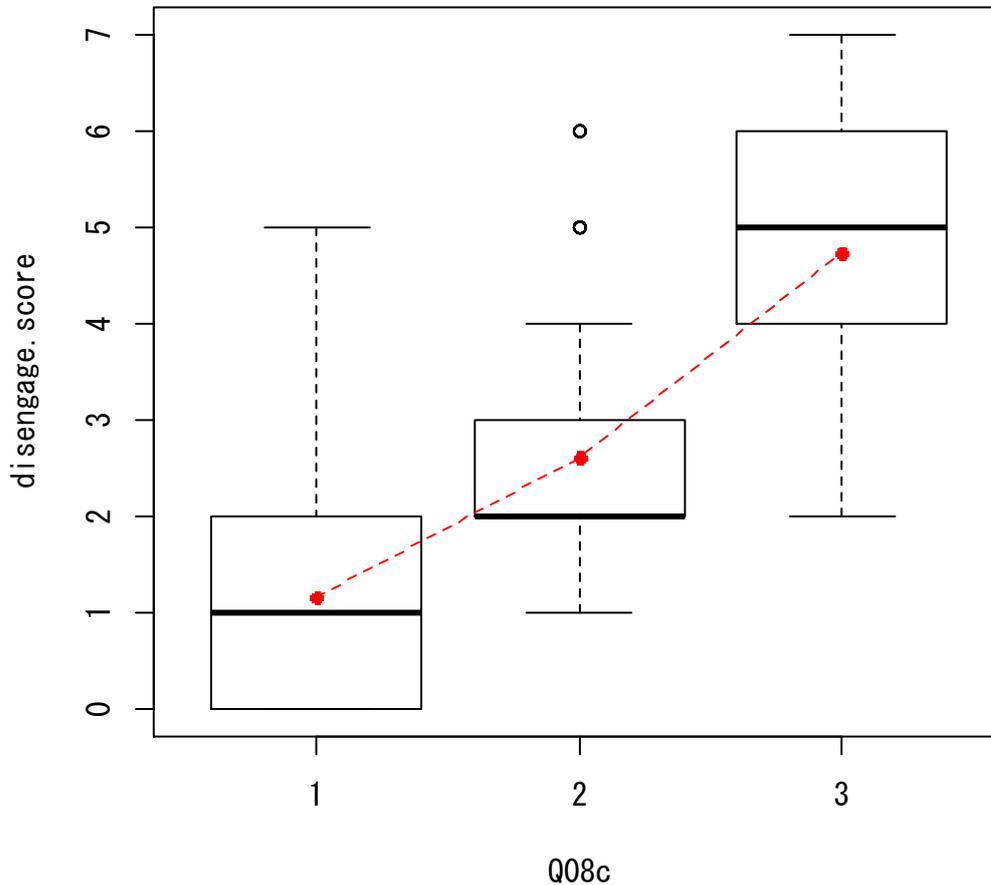
【（問 8a）中学校 3 年生の時をふりかえってみて、不登校で学校を休んでいた時の気持ち】のうち、「a. 特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった」について、「1. そう思わない」(1. 69)→「2. 少しそう思う」(3. 48)→「3. そう思う」(5. 15)という回答の順に学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値が高くなっている。

### 3 「学校へ行きたかったが行けなかった」との関連(問 8c)

c. 学校へ行きたかったが、行けなかった	回答グループ別のスコア平均値
1. そう思う	1. 152745
2. 少しそう思う	2. 618449
3. そう思わない	4. 732348

Q08c の回答グループ別のスコア平均値

disengage. score by Q8c



【(問 8c) 学校へ行きたかったが、行けなかった】に関しては、「1. そう思う」(1. 15)→「2. 少しそう思う」(2. 62)→「3. そう思わない」(4. 73)という回答の順に学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値が高くなっている。

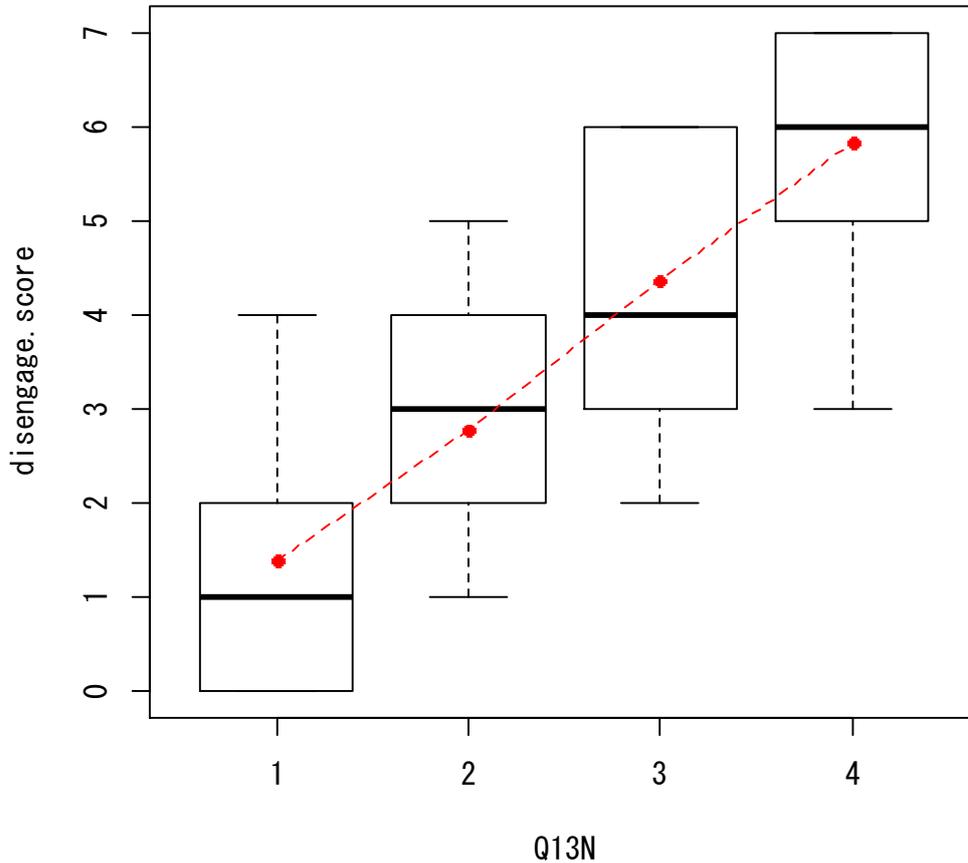
#### 4 不登校に対する後悔の有無との関連(問 13)

選択肢	回答グループ別のスコア平均値
1. しかたがなかった	1. 381857
2. 行けばよかった	2. 782313
3. 行かなくてよかった	4. 374302
4. 何とも思わない	5. 833333

Q13N の回答グループ別のスコア平均値

(回答番号の 1 と 2 が元の変数値とは入れ替わっていることに注意)

### disengage. score by Q13



「今、考えると、小中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか」という質問に対して「1. しかたがなかった」(1.38)→「2. 行けばよかった」(2.78)→「3. 行かなくてよかった」(4.37)→「4. 何とも思わない」(5.83)という回答の順に学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値が高くなっている。

中学校3年生時に学校に行かなかったことについて、「中学校3年生当時」には、「a. 特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった」と感じ、また「c. 学校へ行きたかったが、行けなかった」とは思わず、そして現時点においても、不登校であったことを「4. 何とも思わない」あるいは「3. 行かなくてよかった」と思っている回答者において、この学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値は有意に高くなっている。逆に、中学校3年生当時には、「c. 学校へ行きたかったが、行けなかった」と感じ、また「a. 特に問題を感じたり、気にしたりすることはなかった」とは思わず、そして今振り返ってみたとき、不登校であったことを「2. しかたがなかった」あるいは「1. 行けばよかった」と思っている回答者においては、学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値は有意に低くなっている。

以上のことから、回答者のこの学校回避スコア (Disengage. Score) の値が大きいほど、「学校を休むことは何ら問題ではない」あるいは「気にしたりすることはない」というふう感じて

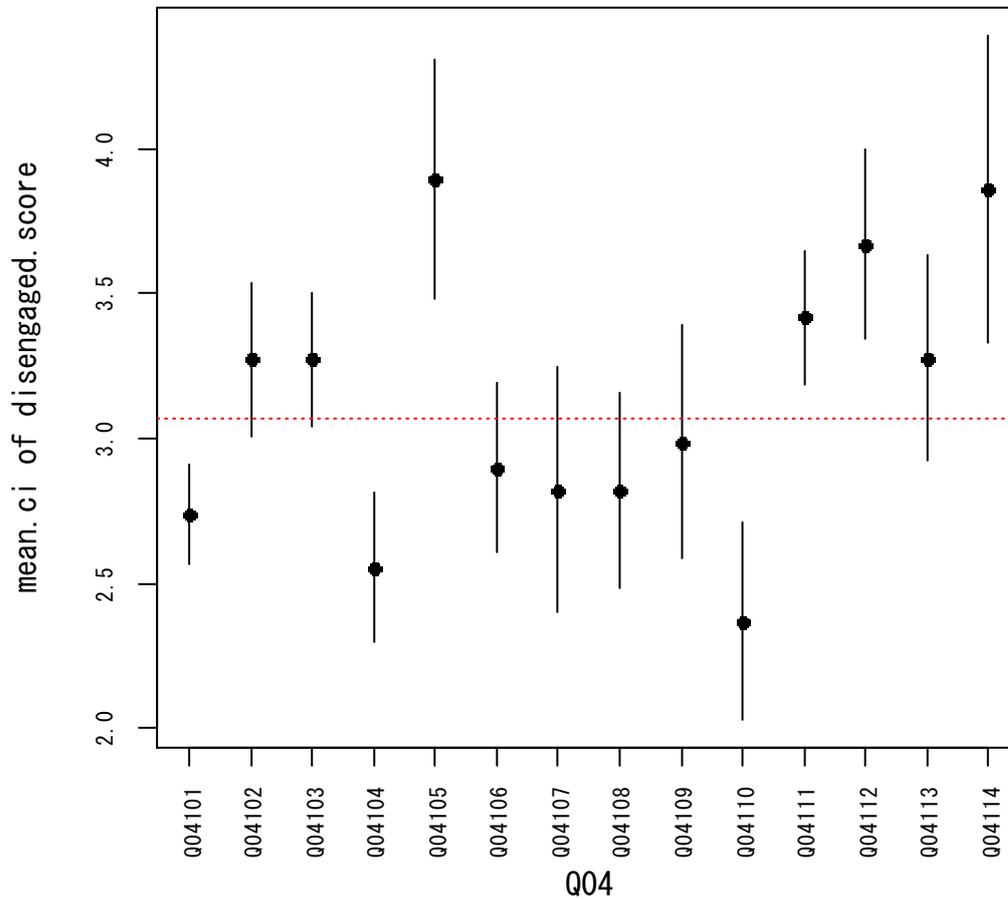
いる傾向が強いとみなすことができる。逆にその値が小さいほど、回答者は「学校に行きたかったが行けなかった」と感じている傾向が強いとみなすことができる。

前者を「学校離れ」傾向と名付け、後者を「不本意不登校」傾向と名付けるとすれば、学校回避スコア (Disengage. Score) は、右上端に位置している「学校離れ」傾向と左下端に位置している「不本意不登校」傾向との間に全ての回答者が位置しているとみなすことができる。

## 5 不登校のきっかけとの関連 (問4)

「問4」を構成する14個の選択項目について、当該項目を選択した回答者の学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値とその99%信頼区間を求めて図示した。なお、図中のドットは当該項目を選択した回答者のスコア平均値を示しており、破線は、全回答者のスコア平均値 (3.07) を示している。

問4	学校回避スコア		
	平均	下限	上限
1. 友人	<u>2.739506</u>	<u>2.566622</u>	<u>2.912390</u>
2. 先生	3.272959	3.008675	3.537243
3. 勉強	3.274262	3.044185	3.504338
4. 部活の友人	<u>2.553936</u>	<u>2.297383</u>	<u>2.810489</u>
5. きまり	<b>3.894040</b>	<b>3.480772</b>	<b>4.307307</b>
6. 順応	2.898876	2.605480	3.192272
7. 環境の変化	2.821918	2.398393	3.245442
8. 親	2.819444	2.482209	3.156680
9. 家族	2.986755	2.583175	3.390335
10. 病気	<u>2.369369</u>	<u>2.029856</u>	<u>2.708883</u>
11. 生活	<b>3.416988</b>	<b>3.184804</b>	<b>3.649173</b>
12. ネット等	<b>3.670886</b>	<b>3.345099</b>	<b>3.996674</b>
13. その他	3.277311	2.923747	3.630875
14. なし	<b>3.860465</b>	<b>3.329957</b>	<b>4.390974</b>

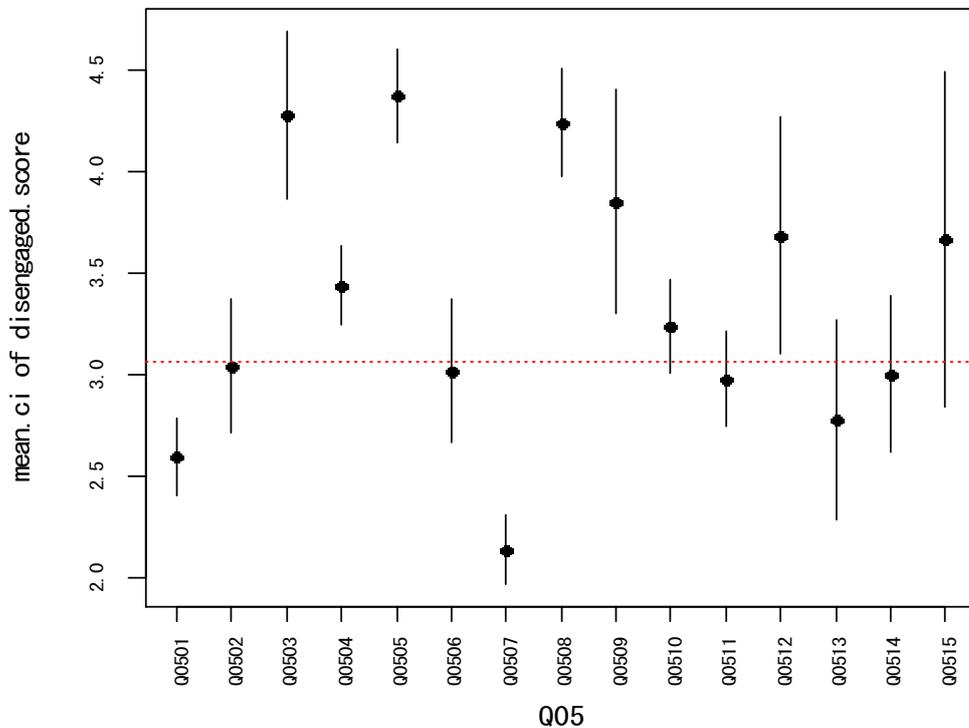


スコア平均値が有意に大きい項目（「学校離れ」傾向と関連の強い「きっかけ」項目（表中では太字））は、「5. きまり」「11. 生活」「12. ネット等」「14. なし」の4項目である。逆に、スコア平均値が有意に小さい項目（「不本意不登校」傾向と関連の強い「きっかけ」項目（表中では斜字下線））は、「1. 友人」「4. 部活の友人」「10. 病気」の3項目である。

## 6 不登校の継続理由との関連（問5）

次に、学校回避スコア（Disengage. Score）と【（問5）不登校の継続理由】との関連を示した。

問5	学校回避スコア		
	平均	下限	上限
1. 友人	<u>2.597111</u>	<u>2.408093</u>	<u>2.786129</u>
2. 先生	3.044898	2.716506	3.373290
3. 非行	<b>4.279412</b>	<b>3.867030</b>	<b>4.691793</b>
4. 無気力	<b>3.439169</b>	<b>3.245414</b>	<b>3.632924</b>
5. 悪意なし	<b>4.373684</b>	<b>4.141249</b>	<b>4.606119</b>
6. 受動的	3.020725	2.664702	3.376748
7. 不安	<u>2.140696</u>	<u>1.971478</u>	<u>2.309913</u>
8. 無理解	<b>4.241722</b>	<b>3.974584</b>	<b>4.508860</b>
9. 注意不足	<b>3.852941</b>	<b>3.300110</b>	<b>4.405772</b>
10. 生活	3.239686	3.008082	3.471289
11. 勉強	2.980630	2.744739	3.216520
12. 支援不足	<b>3.685714</b>	<b>3.101304</b>	<b>4.270124</b>
13. 助言	2.779528	2.288590	3.270465
14. その他	3.004739	2.621127	3.388351
15. 不明	3.666667	2.841496	4.491837



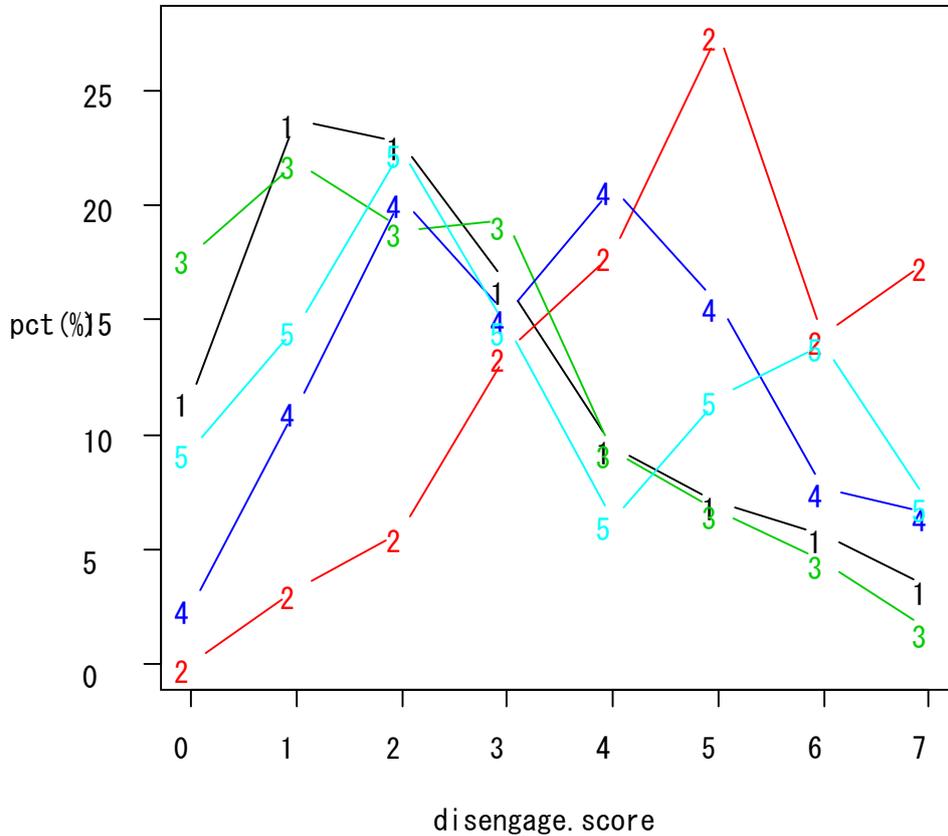
この集計表と図から、スコア平均値が有意に大きい項目（「学校離れ」傾向と関連の強い【（問5）不登校の継続理由】（表中では太字））は、「3. 非行」「4. 無気力」「5. 悪意なし」「8. 無理解」「9. 注意不足」「12. 支援不足」の6項目であり、特に「3. 非行」「5. 悪意なし」「8. 無理解」の3項目の平均値は極めて大きくなっている。ここから、これら6項目（とりわけその平均値が大きい3項目）の不登校の継続理由は「学校離れ」の傾向が顕著である。

上記6項目とは反対に、学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値が有意に小さい項目（「不本意不登校」傾向と関連の強い「きっかけ」項目（表中では斜字下線））は、「1. 友人」「7. 不安」の2項目である。ここから、この2項目の不登校の継続理由は、上記の6項目とは反対に「不本意な不登校」の傾向が顕著である。

## 7 「不登校の5類型」との関連

次の図は、学校回避スコア (Disengage. Score) と「不登校の5類型」の関係をみるために作成した。このグラフには、「不登校の5類型」別に、それぞれの学校回避スコア (Disengage. Score) の分布が示されている。折れ線グラフのマーカーの数字は、「不登校の5類型」であり、1は「無気力」型、2は「遊び・非行」型、3は「人間関係」型、4は「複合」型、5は「その他」型を示している。なお下に表示されているのは、このグラフの元データであり、各類型の学校回避の割合 (%) である。

学校回避 スコア	不登校の5類型				
	1. 無気力	2. 遊び・非行	3. 人間関係	4. 複合	5. その他
0	11. 538	0. 000	17. 844	2. 538	9. 302
1	23. 718	3. 226	21. 933	11. 168	14. 729
2	22. 756	5. 735	18. 959	20. 305	22. 481
3	16. 506	13. 620	19. 331	15. 228	14. 729
4	9. 455	17. 921	9. 294	20. 812	6. 202
5	7. 051	27. 599	6. 691	15. 736	11. 628
6	5. 609	14. 337	4. 461	7. 614	13. 953
7	3. 365	17. 563	1. 487	6. 599	6. 977

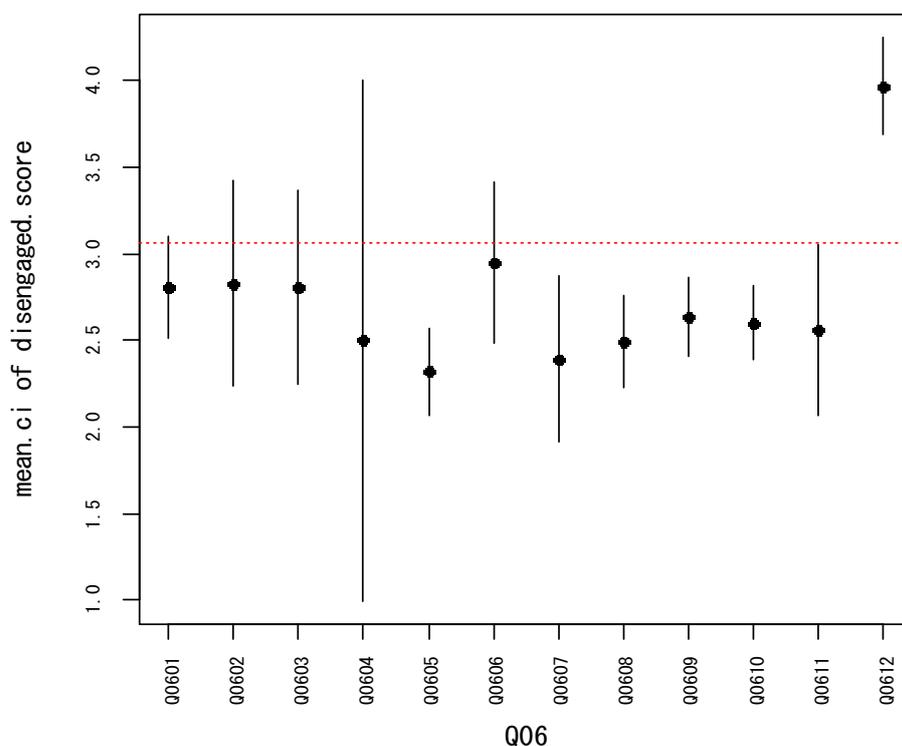


このグラフから、「不登校の5類型」においては、その学校回避スコア (Disengage. Score) の分布が相互にかなり異なっていることを見て取ることができる。特に目を引くのが、類型2の「遊び・非行」型の分布の形状である。この「遊び・非行」型の不登校類型においては、その学校回避スコア (Disengage. Score) の分布が大きく高スコアの方に偏っており、「遊び・非行」型の類型においては「学校離れ」の傾向が強いことを示している。「遊び・非行」型とは対照的なのが類型3の「人間関係」型である。この不登校類型の学校回避スコア (Disengage. Score) の分布は、「遊び・非行」型とは対照的に、低スコアの方に大きく偏っており、このことは、この類型の不登校が「不本意不登校」傾向が強いことを示している。残りの三つの類型の学校回避スコア (Disengage. Score) は、「遊び・非行」型と「人間関係」型という両極に挟まれるかたちで分布しており、それぞれに、一方では「学校離れ」傾向を抱えつつ、同時に「不本意不登校」傾向も抱え込んでいると思われる。(※「第6章3 不登校の類型化」参照)

## 8 中学校3年生時に利用した施設・相談した人との関連（問6）

次の表とグラフは、学校離れスコアと【（問6）中学校3年生時に利用した施設・相談した人】の12個の選択肢について、その選択者の学校回避スコア（Disengage. Score）の平均値と99%信頼区間が示されている。

問6	学校回避スコア		
	平均	下限	上限
1. 適指	2.804714	2.5127861	3.096642
2. 相談	2.829268	2.2363079	3.422229
3. 児相	2.805195	2.2460700	3.364320
4. 保健	2.500000	0.9951293	4.004871
5. 病院	<u>2.319783</u>	<u>2.0679777</u>	<u>2.571589</u>
6. FS	2.948148	2.4832448	3.413052
7. 民間	<u>2.391667</u>	<u>1.9104305</u>	<u>2.872903</u>
8. 養教	<u>2.494505</u>	<u>2.2297792</u>	<u>2.759232</u>
9. 教師	<u>2.637168</u>	<u>2.4086781</u>	<u>2.865658</u>
10. SC	<u>2.602294</u>	<u>2.3886000</u>	<u>2.815989</u>
11. その他	2.556604	2.0629025	3.050305
12. なし	<b>3.968208</b>	<b>3.6866372</b>	<b>4.249779</b>

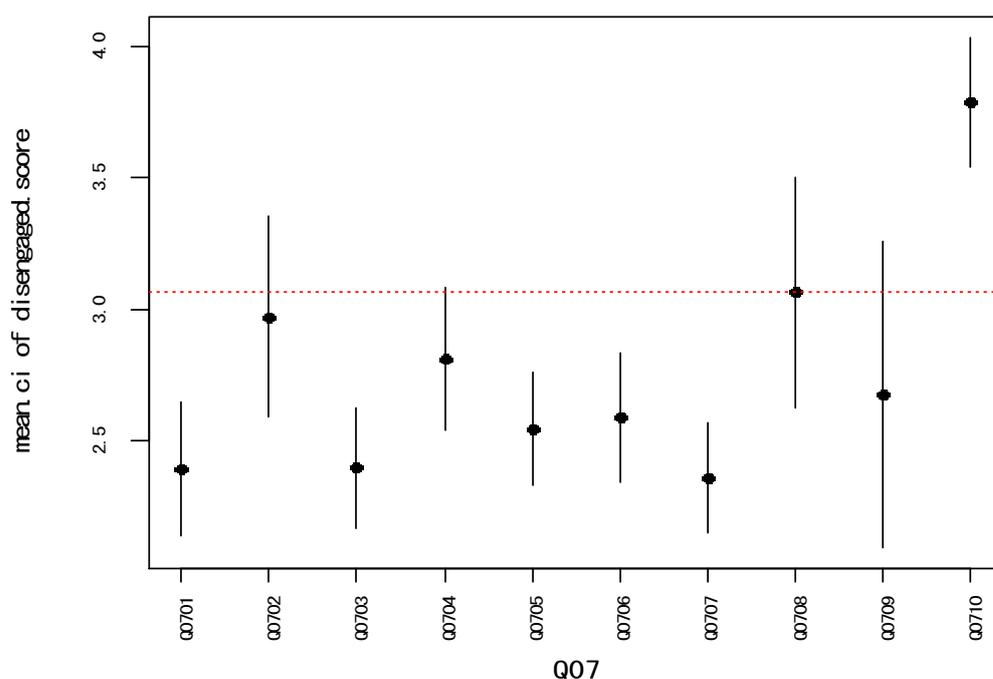


この総括表からは、「12. なし」を選択した回答者の学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値が極めて高いことが分かる。ここから、不登校者支援のために用意されている様々な施設や機関のいずれも利用しない回答者は、「学校離れ」傾向にある。

そしてこれらの回答者とは逆に、「5. 病院」「7. 民間」「8. 養教」「9. 教師」「10. SC」の不登校者支援のための施設や期間を利用した回答者においては、学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値は有意に低くなっており、「不本意不登校」傾向にある。

## 9 中学校3年生時の支援のニーズとの関連 (問7)

問7	学校回避スコア		
	平均	下限	上限
1. 進学	<u>2.390533</u>	<u>2.136374</u>	<u>2.644691</u>
2. 仕事	2.970760	2.588830	3.352691
3. 勉強	<u>2.395778</u>	<u>2.165788</u>	<u>2.625769</u>
4. 技能	2.812883	2.540418	3.085349
5. 表現	<u>2.546414</u>	<u>2.332662</u>	<u>2.760165</u>
6. 居場所	<u>2.588859</u>	<u>2.341760</u>	<u>2.835959</u>
7. 悩み	<u>2.359026</u>	<u>2.148257</u>	<u>2.569796</u>
8. 生活	3.065693	2.627410	3.503977
9. その他	2.675676	2.092960	3.258391
10. なし	<b>3.789899</b>	<b>3.544176</b>	<b>4.035622</b>



この総括表からは、「12. なし」を選択した回答者の学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値が極めて高いことが分かる。ここから、中学3年生時の支援のニーズがない回答者は、「学校離れ」傾向にある。

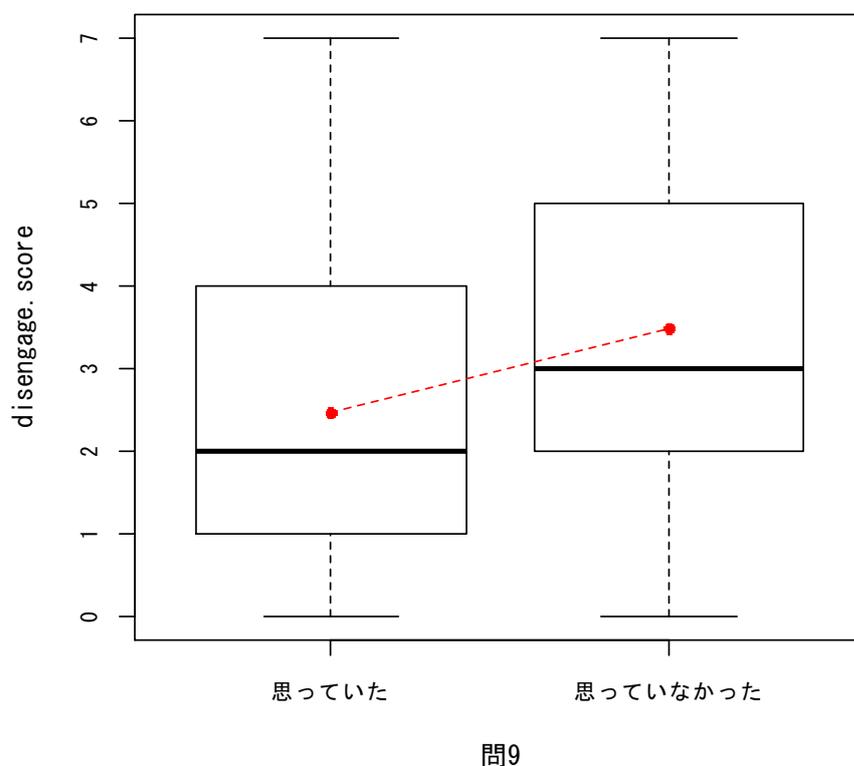
そしてこれらの回答者とは逆に、「1. 進学」「3. 勉強」「5. 表現」「6. 居場所」「7. 悩み」の支援のニーズの回答者においては、学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値は有意に低くなっており、「不本意不登校」傾向にある。

#### 10 「中学校3年生時に学校以外であれば勉強を続けたかったか」との関連 (問9)

次の集計表と boxplot 図は、この「問9」に対する回答別に、学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値を求めて、その結果を示したものである。

問9	学校回避スコア		
	度数	スコア平均値	スコア分散
1. 思っていた	637	2.464678	3.673672
2. 思っていなかった	852	3.497653	3.857809

disengage. score by Q09



学校回避スコア (Disengage. Score) において、中学校3年生時に学校以外であれば勉強を続けたかったと思っていた回答者の平均値は2.46であり、続けたいとは思っていなかった回答者の平均値は3.50であり、両者の間にははっきりとした差がうかがえる。

## 11 高等学校への就学状況（問 15-1）、就職状況の有無（問 15-3）との関連

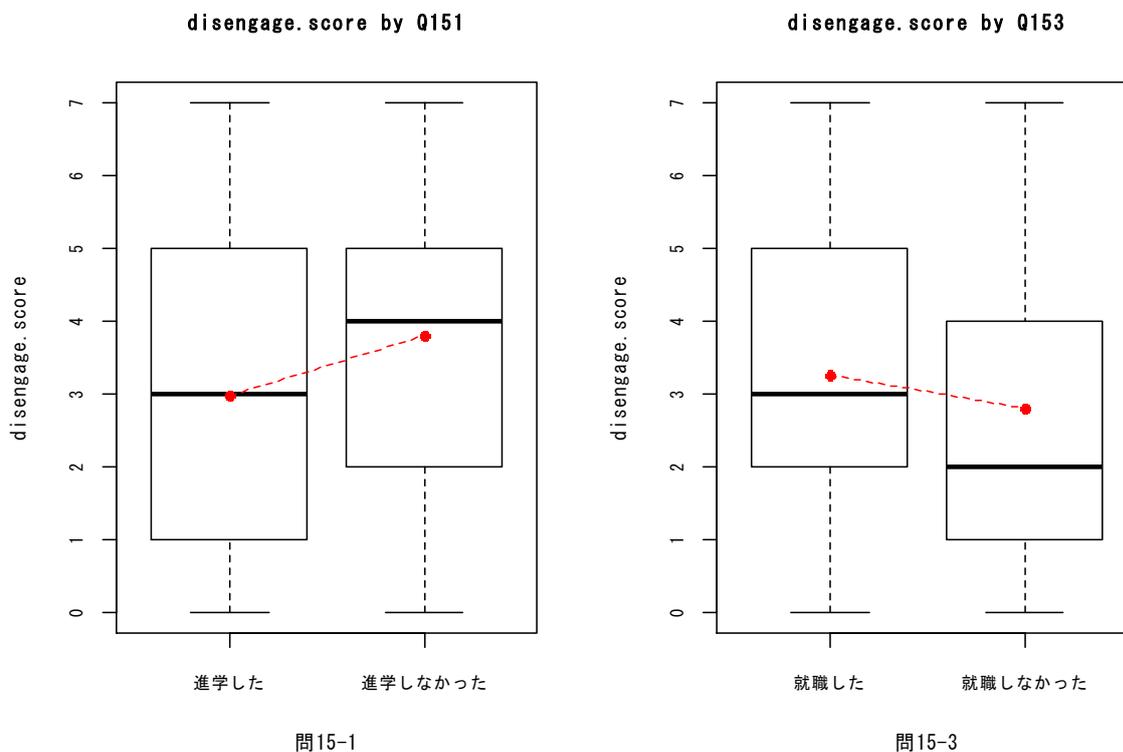
次の二つの集計表と二つの boxplot 図は、「問 15-1」と「問 15-3」の二つの質問に対する回答グループ別に、学校回避スコア（Disengage. Score）の平均値を求めて、その結果を示したものである。

### # disengage. score by Q15-1

問 15-1	学校回避スコア		
	度数	スコア平均値	スコア分散
1. 進学した	1344	2.981399	3.988485
2. 進学しなかった	159	3.792453	4.089563

### # disengage. score by Q15-3

問 15-3	学校回避スコア		
	度数	スコア平均値	スコア分散
1. 就職したことがある	874	3.266590	4.129306
2. 就職したことがない	604	2.798013	3.852998



【問 15-1】高等学校への就学状況】の質問に「2. 進学しなかった」と答えた者の「学校回避」スコアの平均値（3.79）は「1. 進学した」と答えた回答者の平均値（2.98）よりも有意に高くなっており、逆に、【問 15-3】就職状況の有無】の質問に対して、「1. 就職したことがある」と答えた者の平均値（3.27）が「2. 就職したことがない」と答えた者の平均値（2.79）よりも有意に高くなっている。

このことは、進学経験の有無を聞いた「問 15-1」と就職経験の有無を聞いた「問 15-3」の二つ質問に対する回答を組み合わせた四つの回答パターン（「進学経験なし・就職経験なし」「進学経験あり・就職経験なし」「進学経験なし・就職経験あり」「進学経験あり・就職経験あり」）別に、その回答パターンの学校回避スコア（Disengage. Score）の平均値を算出する。

単純集計表

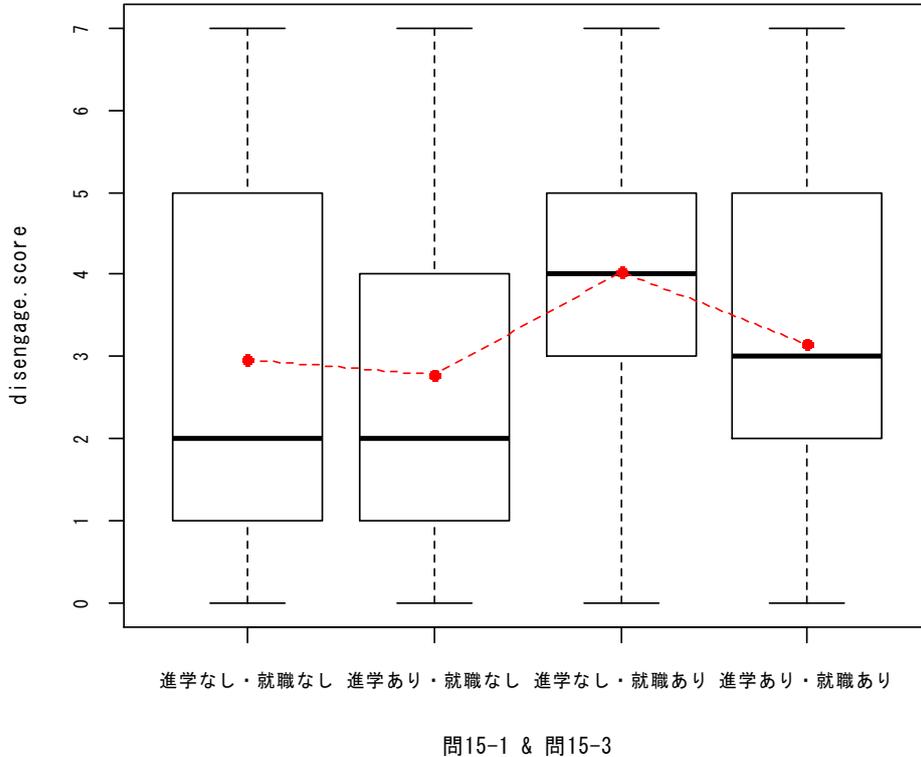
問 15-1×問 15-3	学校回避スコア		
	度数	比率 1	比率 2
1. 進学なし・就職なし	38	2.369	2.427
2. 進学あり・就職なし	601	37.469	38.378
3. 進学なし・就職あり	132	8.229	8.429
4. 進学あり・就職あり	795	49.564	50.766
NA's	38	2.369	
Total	1604	100.000	100.000

さらに、次の集計表と boxplot 図は、この四つの回答者群の「学校離れ」の傾向を示したものである。

#### # disengage. score by Q151 & Q153

問 15-1×問 15-3	学校回避スコア		
	度数	スコア平均値	スコア分散
1. 進学なし・就職なし	34	2.970588	4.877897
2. 進学あり・就職なし	570	2.787719	3.798443
3. 進学なし・就職あり	122	4.024590	3.693605
4. 進学あり・就職あり	750	3.146667	4.103961

disengage. score by Q151 & Q153



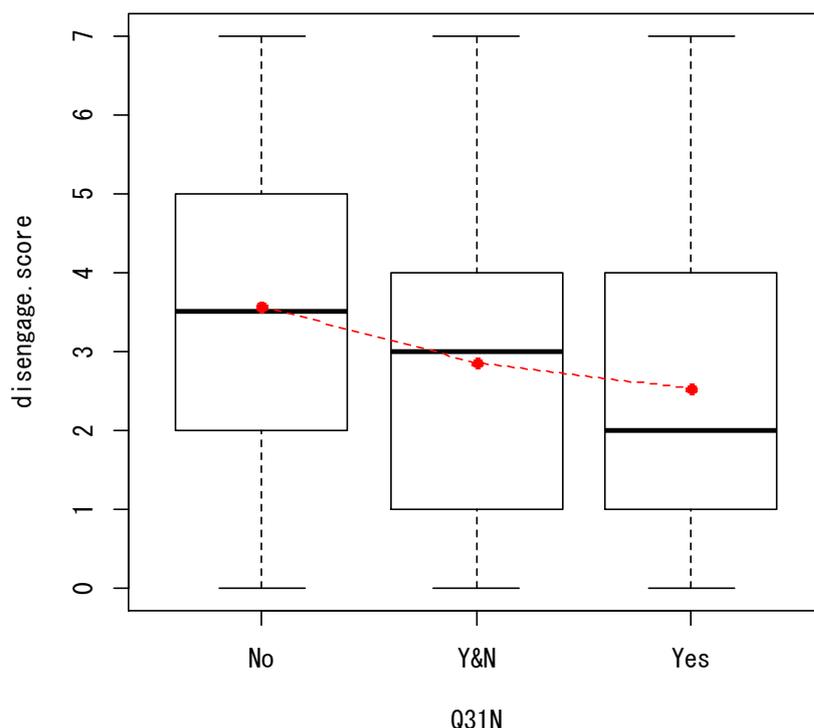
この集計表と図から、四つの回答パターンのうち、そのスコアの平均値がもっとも大きいのは「進学なし・就職あり」である（スコアの平均値は 4.02 であり、これは他の 3 グループの平均値よりも有意に大きい）。次にその平均値が大きいのは「進学あり・就職あり」であり（平均値は 3.15）、最も小さいのは「進学あり・就職なし」である（スコア平均値は 2.79）。

## 12 不登校による現在へのマイナスの影響の認識との関連（問 31）

以下では、この不登校によるマイナスの影響と学校回避スコア（Disengage. Score）との関連を示す。次の集計表と boxplot 図は、【（問 31）不登校による現在へのマイナスの影響の認識】の質問に対する回答別に、学校回避スコア（Disengage. Score）の平均値を求めて、その結果を図示したものである（ただしここでは両者の相関関係をはっきりと示すために問 31（Q31）の変数値をリコードした Q31N を用いている。この変数では「No」が「不登校であったことがマイナスに影響している」とは「2. 感じていない」という回答を、「Y&N」が「3. どちらともいえない」という回答を、そして「Yes」が「1. 感じている」という回答を表している）。

問 31N	学校回避スコア		
	度数	スコア平均値	スコア分散
1. 感じている (Yes)	612	3.568627	4.507558
2. どちらともいえない (Y&N)	522	2.850575	3.781852
3. 感じていない (No)	356	2.525281	2.937387

disengage. score by Q31N



三つの回答（不登校によるマイナスの影響を「1. 感じている (Yes)」と「2. どちらともいえない (Y&N)」、そして「3. 感じていない (No)」における学校回避スコア (disengage. score) の平均値の差は全て統計的に有意であり、そして、不登校によるマイナスの影響を「1. 感じている (Yes)」(3.57)、「2. どちらともいえない (Y&N)」(2.85)、「3. 感じていない (No)」(2.53)の順に、学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値は高い。すなわち、不登校によるマイナスの影響を感じる度合いと学校回避の傾向との間には、不登校によるマイナスの影響を感じる度合いが大きいほど、不本意不登校傾向が強い、という反比例の関係（負の相関関係）が示されている。

中学校3年生時に不登校であったことを問題と感じたり、気にしたりする度合いが小さい者は、その不登校によるマイナスの影響の認識の程度は低く、逆に、本当は学校に行きたかったが行けなかったと感じたり、後悔したりしている者にとっては、そのマイナスの影響の認識の度合いが高くなっているという傾向が示されている。

同様の関連は、不利益スコア (disbenefit. score) と学校回避スコア (Disengage. Score) との関連を見ることによっても確認することができる。不利益スコア (disbenefit score) は0から12までの正数値をとる合成変数であり、その数値が大きいほど不登校によるマイナスの影響が大きく、またその認知の程度も高いことを示している（付録：参考2）。同様に、学校回避スコア (Disengage. Score) も0から7までの正数値をとる合成変数であり、その値が大きいほど学校回避傾向が強いということを表している。

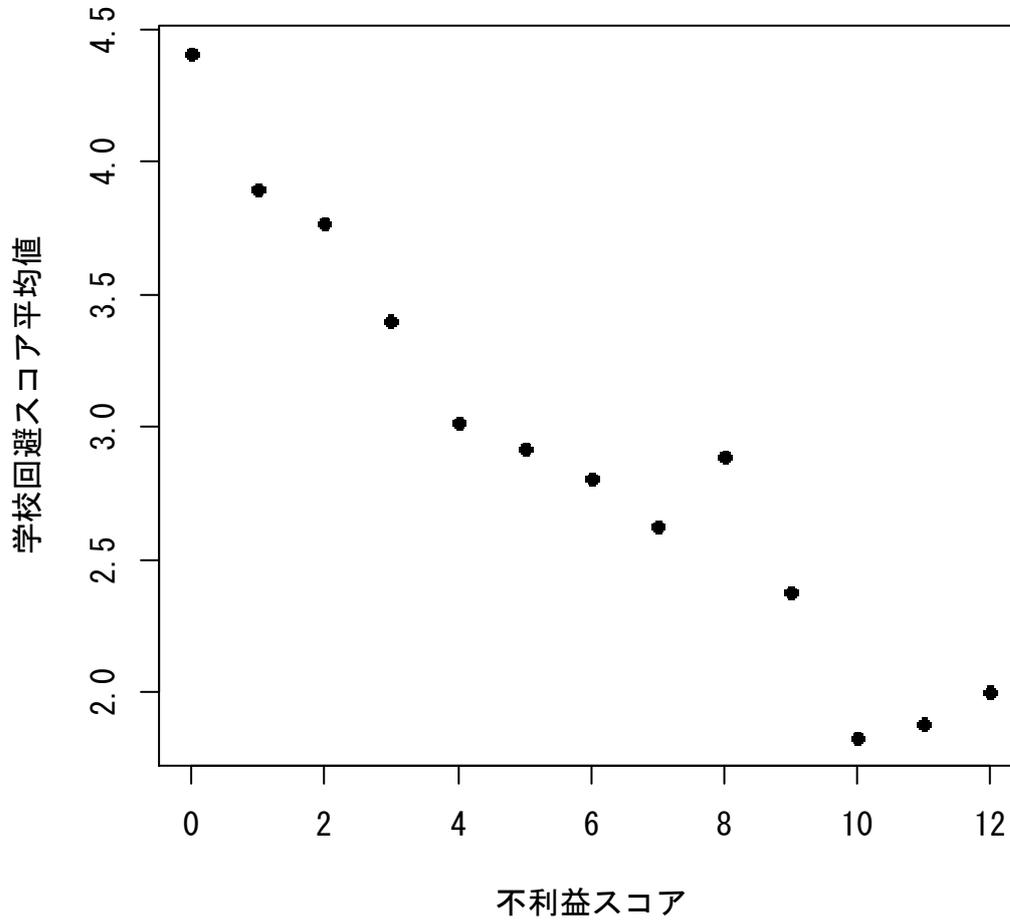
以下の表はこの不利益スコア (disbenefit. score) と学校回避スコア (Disengage. Score) のクロス集計表である。

不利益スコア	学校回避スコア								合計
	0	1	2	3	4	5	6	7	
0	5	8	13	7	9	19	13	24	98
1	3	12	12	15	13	20	15	9	99
2	9	9	25	20	18	19	12	20	132
3	10	26	22	17	21	20	18	12	146
4	12	24	42	33	11	24	14	7	167
5	18	29	32	27	25	22	14	5	172
6	15	33	32	28	24	19	7	7	165
7	15	29	30	32	19	10	9	3	147
8	8	25	23	23	18	16	2	7	122
9	12	23	22	15	12	6	4	2	96
10	10	20	11	9	5	1	2	0	58
11	8	9	7	4	4	0	1	1	34
12	3	2	3	2	0	2	0	0	12
合計	128	249	274	232	179	178	111	97	1448

さらに、以下の集計表は、不利益スコア (disbenefit score) の得点別に学校回避スコア (Disengage. Score) の平均値を求めたものである。図はこれを散布図として示したものである。

不利益スコア	度数	学校回避スコアの平均値	スコア分散
0	98	4.41	4.97
1	99	3.90	3.87
2	132	3.77	4.47
3	146	3.40	4.46
4	167	3.02	3.56
5	172	2.92	3.67
6	165	2.81	3.46
7	147	2.63	3.07
8	122	2.89	3.35
9	96	2.38	3.04
10	58	1.83	2.25
11	34	1.88	3.08
12	12	2.00	3.09

### 「学校回避スコア」 by 「不利益スコア」



この集計表と図から、両変数のあいだには、不利益スコア (disbenefit score) の値が大きくなれば学校回避スコア (Disengage. Score) の値は小さくなる、あるいは学校回避スコア (Disengage. Score) の値が大きくなれば不利益スコア (disbenefit score) の値は小さくなる、という負の相関関係があるということが分かる。